

## 「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編）」と 「金融分野における個人情報保護に関するガイドライン」の二段表

※「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編）」の網掛け部分については、同ガイドラインの規定によらず「金融分野における個人情報保護に関するガイドライン（「金融分野における個人情報保護に関するガイドラインの安全管理措置等についての実務指針」を含む。）」の規定に対応する形となる。

○「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編）」と「金融分野における個人情報保護に関するガイドライン」の二段表

個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞	金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）
<p>1 目的及び適用対象</p> <p>1-1 目的</p> <p>本ガイドラインは、事業者が個人情報の適正な取扱いの確保に関して行う活動を支援すること、及び当該支援により事業者が講ずる措置が適切かつ有効に実施されることを目的として、個人情報の保護に関する法律（平成 15 年法律第 57 号。以下「法」という。）第 4 条、第 8 条及び第 60 条に基づき具体的な指針として定めるものである。</p> <p>なお、法の規定のうち、第 24 条（外国にある第三者への提供の制限）、第 25 条（第三者提供に係る記録の作成等）及び第 26 条（第三者提供を受ける際の確認等）、並びに第 4 章第 2 節（匿名加工情報取扱事業者等の義務）（法第 2 条第 9 項及び同第 10 項に定める「匿名加工情報」及び「匿名加工情報取扱事業者」の定義に関する内容を含む。）に関する内容については、各々について分かりやすく一体的に示す観点から、別途「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（外国にある第三者への提供編）」（平成 28 年個人情報保護委員会告示第 7 号）、「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（第三者提供時の確認・記録義務編）」（平成 28 年個人情報保護委員会告示第 8 号）及び「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（匿名加工情報編）」（平成 28 年個人情報保護委員会告示第 9 号）においてそれぞれ定めている。</p>	<p>第 1 条 目的等（法第 1 条関係）</p> <p>1 本ガイドラインは、個人情報の保護に関する法律（平成 15 年法律第 57 号。以下「法」という。）、個人情報の保護に関する法律施行令（平成 15 年政令第 507 号。以下「施行令」という。）、個人情報の保護に関する法律施行規則（平成 28 年個人情報保護委員会規則第 3 号。以下「施行規則」という。）及び個人情報の保護に関する基本方針（平成 16 年 4 月 2 日閣議決定。第 18 条において「基本方針」という。）を踏まえ、個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編）（平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号。以下「通則ガイドライン」という。）を基礎として、法第 6 条及び第 8 条に基づき、金融庁が所管する分野（以下「金融分野」という。）における個人情報について保護のための格別の措置が講じられるよう必要な措置を講じ、及び当該分野における事業者が個人情報の適正な取扱いの確保に関して行う活動を支援する具体的な指針として定めるものである。</p> <p>本ガイドラインにおいて特に定めのない部分については、通則ガイドライン、個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（外国にある第三者への提供編）（平成 28 年個人情報保護委員会告示第 7 号）、同ガイドライン（第三者提供時の確認・記録義務編）（平成 28 年個人情報保護委員会告示第 8 号）及び同ガイドライン（匿名加工情報編）（平成 28 年個人情報保護委員会告示第 9 号）が適用される。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）〈法令条文省略〉</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>本ガイドラインの中で、「しなければならない」及び「してはならない」と記述している事項については、これらに従わなかった場合、法違反と判断される可能性がある。</p> <p>一方、「努めなければならない」、「望ましい」等と記述している事項については、これらに従わなかったことをもって直ちに法違反と判断されることはないが（5（「勧告」、「命令」、「緊急命令」等についての考え方）参照）、「個人情報」は、個人の人格尊重の理念の下に慎重に取り扱われるべきものであることにかんがみ、その適正な取扱いが図られなければならない。」とする法の基本理念（法第 3 条）を踏まえ、事業者の特性や規模に応じ可能な限り対応することが望まれるものである。もっとも、法の目的（法第 1 条）の趣旨に照らして、公益上必要な活動や正当な事業活動等までも制限するものではない。</p> <p>本ガイドラインにおいて記述した具体例は、事業者の理解を助けることを目的として典型的なものを示したものであり、全ての事案を網羅したものでなく、記述した内容に限定する趣旨で記述したものでもない。また、記述した具体例においても、個別ケースによっては別途考慮すべき要素もあり得るので注意を要する。</p> <p>なお、認定個人情報保護団体（※）が個人情報保護指針を作成又は変更し、また、事業者団体等が事業の実態及び特性を踏まえ、当該事業者団体等の会員企業等を対象とした自主的ルール（事業者団体ガイドライン等）を作成又は変更することもあり得るが、その場合は、認定個人情報保護団体の対象事業者や事業者団体等の会員企業等は、個人情報の取扱いに当たり、法及び本ガイドラインに加えて、当該指針又はルールに沿った対応を行う必要がある。特に、認定個人情報保護団体においては、法改正により、認定個人情報保護団体が対象事業者に対し個人情報保護指針を遵守させるために必要な措置をとらなければならないこととされたことを踏まえることも重要であ</p>	<p>2 本ガイドライン中「～なければならない」と記載されている規定について、それに従わない場合は、法の規定違反と判断され得る。</p> <p>また、本ガイドライン中「こととする」、「適切である」及び「望ましい」と記載されている規定については、金融分野における個人情報取扱事業者がその規定に従わない場合には、法の規定違反と判断されることはないが、当該規定は、金融分野の個人情報の性質及び利用方法に鑑み、個人情報の取扱いに関して、金融分野における個人情報取扱事業者に特に厳格な措置が求められる事項として規定されており、金融分野における個人情報取扱事業者においては、遵守に努めるものとする。</p> <p>3 本ガイドラインにおいて記載した具体例については、これに限定する趣旨で記載したのではなく、また、個別ケースによって別途考慮すべき要素があり得るので注意を要する。</p> <p>4 金融分野における認定個人情報保護団体が個人情報保護指針を作成又は変更し、また、金融分野における事業者団体等が事業の実態及び特性を踏まえ、当該事業者団体等の会員企業等を対象とした自主的ルール（事業者団体ガイドライン等）を作成又は変更することもあり得るが、その場合は、認定個人情報保護団体の対象事業者や事業者団体等の会員企業等は、個人情報の取扱いに当たり、個人情報の保護に関する法令、通則ガイドライン及び本ガイドライン等に加えて、当該指針又はルールに沿った対応を行う必要がある。特に、認定個人情報保護団体においては、法改正により、認定個人情報保護団体が対象事業者に対し個人情報保護指針を遵守させるために必要な</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>る（法第 53 条第 4 項参照）。</p> <p>（※）認定個人情報保護団体制度は、個人情報取扱事業者又は匿名加工情報取扱事業者の個人情報又は匿名加工情報の適正な取扱いを目的として、対象事業者の苦情処理や対象事業者に対する情報提供を行う民間団体に対し、個人情報保護委員会が認定する制度であり、当該業務の信頼性を確保し、民間団体による個人情報の保護の推進を図ろうとするものである。</p> <p>1-2 適用対象</p> <p>本ガイドラインは、事業者の業種・規模等を問わず、法の適用対象である個人情報取扱事業者又は匿名加工情報取扱事業者（以下「個人情報取扱事業者等」という。）に該当する事業者に適用される。</p>	<p>措置をとらなければならないこととされたことを踏まえることも重要である</p> <p>5 金融分野における個人情報取扱事業者は、個人情報の漏えい、不正流出等を防止等するため、個人情報の保護に関する法令、通則ガイドライン及び本ガイドラインのほか、関係法令等に従い、個人情報の適正な管理体制を整備する必要がある。</p>
<p>2 定義</p> <p>2-1 個人情報（法第 2 条第 1 項関係）</p> <p>「個人情報」（※ 1）とは、生存する「個人に関する情報」（※ 2）（※ 3）であって、「当該情報に含まれる氏名、生年月日その他の記述等により特定の個人を識別することができるもの（他の情報と容易に照合することができ（※ 4）、それにより特定の個人を識別することができるものを含む。）」（法第 2 条第 1 項第 1 号）、又は「個人識別符号（※ 5）が含まれるもの」（同項第 2 号）をいう。</p> <p>「個人に関する情報」とは、氏名、住所、性別、生年月日、顔画像等個人</p>	<p>＜法第 2 条第 1 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>を識別する情報に限られず、個人の身体、財産、職種、肩書等の属性に関して、事実、判断、評価を表す全ての情報であり、評価情報、公刊物等によって公にされている情報や、映像、音声による情報も含まれ、暗号化等によって秘匿化されているかどうかを問わない。</p> <p>【個人情報に該当する事例】</p> <p>事例 1）本人の氏名</p> <p>事例 2）生年月日、連絡先（住所・居所・電話番号・メールアドレス）、会社における職位又は所属に関する情報について、それらと本人の氏名を組み合わせた情報</p> <p>事例 3）防犯カメラに記録された情報等本人が判別できる映像情報</p> <p>事例 4）本人の氏名が含まれる等の理由により、特定の個人を識別できる音声録音情報</p> <p>事例 5）特定の個人を識別できるメールアドレス（kojin_ichiro@example.com 等のようにメールアドレスだけの情報の場合であっても、example 社に所属するコジイチロウのメールアドレスであることが分かるような場合等）</p> <p>事例 6）個人情報を取得後に当該情報に付加された個人に関する情報（取得時に生存する特定の個人を識別することができなかったとしても、取得後、新たな情報が付加され、又は照合された結果、生存する特定の個人を識別できる場合は、その時点で個人情報に該当する。）</p> <p>事例 7）官報、電話帳、職員録、法定開示書類（有価証券報告書等）、新聞、ホームページ、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）等で公にされている特定の個人を識別できる情報</p> <p>（※ 1）法は、「個人情報」、「個人データ」（2-6（個人データ）参照）、「保有個人データ」（2-7（保有個人データ）参照）、「要配慮個人情報」（2-3</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>（要配慮個人情報）参照）、「匿名加工情報」（2-8（匿名加工情報）参照）等の語を使い分けており、個人情報取扱事業者等に課される義務はそれぞれ異なるので、注意を要する。</p> <p>（※ 2）死者に関する情報が、同時に、遺族等の生存する個人に関する情報でもある場合には、当該生存する個人に関する情報に該当する。</p> <p>（※ 3）法人その他の団体は「個人」に該当しないため、法人等の団体そのものに関する情報は「個人情報」に該当しない（ただし、役員、従業員等に関する情報は個人情報に該当する。）。なお、「個人」は日本国民に限らず、外国人も含まれる。</p> <p>（※ 4）「他の情報と容易に照合することができ」とは、事業者の実態に即して個々の事例ごとに判断されるべきであるが、通常の業務における一般的な方法で、他の情報と容易に照合することができる状態をいい、例えば、他の事業者への照会を要する場合等であって照合が困難な状態は、一般に、容易に照合することができない状態であると解される。</p> <p>（※ 5）個人識別符号については、2-2（個人識別符号）を参照のこと。</p> <p>2-2 個人識別符号（法第 2 条第 2 項関係）</p> <p>「個人識別符号」とは、当該情報単体から特定の個人を識別できるものとして個人情報の保護に関する法律施行令（平成 15 年政令第 507 号。以下「政令」という。）に定められた文字、番号、記号その他の符号をいい、これに該当するものが含まれる情報は個人情報となる（2-（個人情報）参照）（※）。</p> <p>具体的な内容は、政令第 1 条及び個人情報の保護に関する法律施行規則（平成 28 年個人情報保護委員会規則第 3 号。以下「規則」という。）第 2 条から第 4 条までに定めるとおりである。</p> <p>政令第 1 条第 1 号においては、同号イからトまでに掲げる身体の特徴のいずれかを電子計算機の用に供するために変換した文字、番号、記号その他の符号のうち、「特定の個人を識別するに足りるものとして個人情報保護委員</p>	<p>＜法第 2 条第 2 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）〈法令条文省略〉</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>会規則で定める基準に適合するもの」が個人識別符号に該当するとされている。当該基準は規則第 2 条において定められているところ、この基準に適合し、個人識別符号に該当することとなるものは次のとおりである。</p> <p>イ 細胞から採取されたデオキシリボ核酸（別名 DNA）を構成する塩基の配列</p> <p>ゲノムデータ（細胞から採取されたデオキシリボ核酸（別名 DNA）を構成する塩基の配列を文字列で表記したもの）のうち、全核ゲノムシーケンズデータ、全エクソームシーケンズデータ、全ゲノム一塩基多型（single nucleotide polymorphism：SNP）データ、互いに独立な 40 箇所以上の SNP から構成されるシーケンズデータ、9 座位以上の 4 塩基単位の繰り返し配列（short tandem repeat：STR）等の遺伝型情報により本人を認証することができるようにしたもの</p> <p>ロ 顔の骨格及び皮膚の色並びに目、鼻、口その他の顔の部位の位置及び形状によって定まる容貌</p> <p>顔の骨格及び皮膚の色並びに目、鼻、口その他の顔の部位の位置及び形状から抽出した特徴情報を、本人を認証することを目的とした装置やソフトウェアにより、本人を認証することができるようにしたもの</p> <p>ハ 虹彩の表面の起伏により形成される線状の模様</p> <p>虹彩の表面の起伏により形成される線状の模様から、赤外光や可視光等を用い、抽出した特徴情報を、本人を認証することを目的とした装置やソフトウェアにより、本人を認証することができるようにしたもの</p> <p>ニ 発声の際の声帯の振動、声門の開閉並びに声道の形状及びその変化によって定まる声の質</p> <p>音声から抽出した発声の際の声帯の振動、声門の開閉並びに声道の形状及びその変化に関する特徴情報を、話者認識システム等本人を認証することを目的とした装置やソフトウェアにより、本人を認証することができるようにしたもの</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>ホ 歩行の際の姿勢及び両腕の動作、歩幅その他の歩行の態様 歩行の際の姿勢及び両腕の動作、歩幅その他の歩行の態様から抽出した特徴情報を、本人を認証することを目的とした装置やソフトウェアにより、本人を認証することができるようにしたもの</p> <p>ヘ 手のひら又は手の甲若しくは指の皮下の静脈の分岐及び端点によって定まるその静脈の形状 手のひら又は手の甲若しくは指の皮下の静脈の分岐及び端点によって定まるその静脈の形状等から、赤外光や可視光等を用い抽出した特徴情報を、本人を認証することを目的とした装置やソフトウェアにより、本人を認証することができるようにしたもの</p> <p>ト 指紋又は掌紋 （指紋）指の表面の隆線等で形成された指紋から抽出した特徴情報を、本人を認証することを目的とした装置やソフトウェアにより、本人を認証することができるようにしたもの （掌紋）手のひらの表面の隆線や皺等で形成された掌紋から抽出した特徴情報を、本人を認証することを目的とした装置やソフトウェアにより、本人を認証することができるようにしたもの</p> <p>チ 組合せ 政令第 1 条第 1 号イからトまでに掲げるものから抽出した特徴情報を、組み合わせ、本人を認証することを目的とした装置やソフトウェアにより、本人を認証することができるようにしたもの</p> <p>（※）「その利用者若しくは購入者又は発行を受ける者ごとに異なるものとなるように」（法第 2 条第 2 項第 2 号）とは、文字、番号、記号その他の符号が利用者等によって異なるようにすることをいう。</p>	<p>＜法第 2 条第 3 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>
<p>2-3 要配慮個人情報（法第 2 条第 3 項関係） 「要配慮個人情報」とは、不当な差別や偏見その他の不利益が生じないよ</p>	<p>＜法第 2 条第 3 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>



<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>うにその取扱いに特に配慮を要するものとして次の(1)から(11)までの記述等が含まれる個人情報をいう。</p> <p>要配慮個人情報の取得や第三者提供には、原則として本人の同意が必要であり、法第 23 条第 2 項の規定による第三者提供（オプトアウトによる第三者提供）は認められていないので、注意が必要である（3-2-2（要配慮個人情報の取得）、3-4-1（第三者提供の制限の原則）、3-4-2（オプトアウトによる第三者提供）参照）。</p> <p>なお、次に掲げる情報を推知させる情報にすぎないもの（例：宗教に関する書籍の購買や貸出しに係る情報等）は、要配慮個人情報には含まない。</p> <p>(1) 人種 人種、世系又は民族的若しくは種族的出身を広く意味する。なお、単純な国籍や「外国人」という情報は法的地位であり、それだけでは人種には含まない。また、肌の色は、人種を推知させる情報にすぎないため、人種には含まない。</p> <p>(2) 信条 個人の基本的なものの見方、考え方を意味し、思想と信仰の双方を含むものである。</p> <p>(3) 社会的身分 ある個人にその境遇として固着していて、一生の間、自らの力によって容易にそれから脱し得ないような地位を意味し、単なる職業的地位や学歴は含まない。</p> <p>(4) 病歴 病気に罹患した経歴を意味するもので、特定の病歴を示した部分（例：特定の個人ががんに罹患している、統合失調症を患っている等）が該当す</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>る。</p> <p>(5) 犯罪の経歴 前科、すなわち有罪の判決を受けこれが確定した事実が該当する。</p> <p>(6) 犯罪により害を被った事実 身体的被害、精神的被害及び金銭的被害の別を問わず、犯罪の被害を受けた事実を意味する。具体的には、刑罰法令に規定される構成要件に該当し得る行為のうち、刑事事件に関する手続に着手されたものが該当する。</p> <p>(7) 身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の個人情報保護委員会規則で定める心身の機能の障害があること（政令第 2 条第 1 号関係） 次の①から④までに掲げる情報をいう。この他、当該障害があること又は過去にあったことを特定させる情報（例：障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（平成 17 年法律第 123 号）に基づく障害福祉サービスを受けていること又は過去に受けていたこと）も該当する。</p> <p>① 「身体障害者福祉法（昭和 24 年法律第 283 号）別表に掲げる身体上の障害」があることを特定させる情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 医師又は身体障害者更生相談所により、別表に掲げる身体上の障害があることを診断又は判定されたこと（別表上の障害の名称や程度に関する情報を含む。）</li> <li>・ 都道府県知事、指定都市の長又は中核市の長から身体障害者手帳の交付を受け並びに所持していること又は過去に所持していたこと（別表上の障害の名称や程度に関する情報を含む。）</li> <li>・ 本人の外見上明らかに別表に掲げる身体上の障害があること</li> </ul> <p>② 「知的障害者福祉法（昭和 35 年法律第 37 号）にいう知的障害」があ</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>ることを特定させる情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 医師、児童相談所、知的障害者更生相談所、精神保健福祉センター、障害者職業センターにより、知的障害があると診断又は判定されたこと（障害の程度に関する情報を含む。）</li> <li>・ 都道府県知事又は指定都市の長から療育手帳の交付を受け並びに所持していること又は過去に所持していたこと（障害の程度に関する情報を含む。）</li> </ul> <p>③ 「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律（昭和 25 年法律第 123 号）にいう精神障害（発達障害者支援法（平成 16 年法律第 167 号）第 2 条第 2 項に規定する発達障害を含み、知的障害者福祉法にいう知的障害を除く。）」があることを特定させる情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 医師又は精神保健福祉センターにより精神障害や発達障害があると診断又は判定されたこと（障害の程度に関する情報を含む。）</li> <li>・ 都道府県知事又は指定都市の長から精神障害者保健福祉手帳の交付を受け並びに所持していること又は過去に所持していたこと（障害の程度に関する情報を含む。）</li> </ul> <p>④ 「治療方法が確立していない疾病その他の特殊の疾病であって障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律第 4 条第 1 項の政令で定めるものによる障害の程度が同項の厚生労働大臣が定める程度であるもの」があることを特定させる情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 医師により、厚生労働大臣が定める特殊の疾病による障害により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受けていると診断されたこと（疾病の名称や程度に関する情報を含む。）</li> </ul> <p>(8) 本人に対して医師その他医療に関連する職務に従事する者（次号において「医師等」という。）により行われた疾病の予防及び早期発見のための健康診断その他の検査（同号において「健康診断等」という。）の結果（政令第 2 条第 2 号関係）（※）</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）〈法令条文省略〉</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>疾病の予防や早期発見を目的として行われた健康診査、健康診断、特定健康診査、健康測定、ストレスチェック、遺伝子検査（診療の過程で行われたものを除く。）等、受診者本人の健康状態が判明する検査の結果が該当する。</p> <p>具体的な事例としては、労働安全衛生法（昭和 47 年法律第 57 号）に基づいて行われた健康診断の結果、同法に基づいて行われたストレスチェックの結果、高齢者の医療の確保に関する法律（昭和 57 年法律第 80 号）に基づいて行われた特定健康診査の結果などが該当する。また、法律に定められた健康診査の結果等に限定されるものではなく、人間ドックなど保険者や事業主が任意で実施又は助成する検査の結果も該当する。さらに、医療機関を介さないで行われた遺伝子検査により得られた本人の遺伝型とその遺伝型の疾患へのかかりやすさに該当する結果等も含まれる。なお、健康診断等を受診したという事実は該当しない。</p> <p>なお、身長、体重、血圧、脈拍、体温等の個人の健康に関する情報を、健康診断、診療等の事業及びそれに関する業務とは関係ない方法により知り得た場合は該当しない。</p> <p>(9) 健康診断等の結果に基づき、又は疾病、負傷その他の心身の変化を理由として、本人に対して医師等により心身の状態の改善のための指導又は診療若しくは調剤が行われたこと（政令第 2 条第 3 号関係）（※）</p> <p>「健康診断等の結果に基づき、本人に対して医師等により心身の状態の改善のための指導が行われたこと」とは、健康診断等の結果、特に健康の保持に努める必要がある者に対し、医師又は保健師が行う保健指導等の内容が該当する。</p> <p>指導が行われたこと具体的な事例としては、労働安全衛生法に基づき医師又は保健師により行われた保健指導の内容、同法に基づき医師により行われた面接指導の内容、高齢者の医療の確保に関する法律に基づき医師、保健師、管理栄養士により行われた特定保健指導の内容等が該当する。</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>また、法律に定められた保健指導の内容に限定されるものではなく、保険者や事業主が任意で実施又は助成により受診した保健指導の内容も該当する。なお、保健指導等を受けたという事実も該当する。</p> <p>「健康診断等の結果に基づき、又は疾病、負傷その他の心身の変化を理由として、本人に対して医師等により診療が行われたこと」とは、病院、診療所、その他の医療を提供する施設において診療の過程で、患者の身体の状態、病状、治療状況等について、医師、歯科医師、薬剤師、看護師その他の医療従事者が知り得た情報全てを指し、例えば診療記録等がこれに該当する。また、病院等を受診したという事実も該当する。</p> <p>「健康診断等の結果に基づき、又は疾病、負傷その他の心身の変化を理由として、本人に対して医師等により調剤が行われたこと」とは、病院、診療所、薬局、その他の医療を提供する施設において調剤の過程で患者の身体の状態、病状、治療状況等について、薬剤師（医師又は歯科医師が自己の処方箋により自ら調剤する場合を含む。）が知り得た情報全てを指し、調剤録、薬剤服用歴、お薬手帳に記載された情報等が該当する。また、薬局等で調剤を受けたという事実も該当する。</p> <p>なお、身長、体重、血圧、脈拍、体温等の個人の健康に関する情報を、健康診断、診療等の事業及びそれに関する業務とは関係のない方法により知り得た場合は該当しない。</p> <p>(10) 本人を被疑者又は被告人として、逮捕、捜索、差押え、勾留、公訴の提起その他の刑事事件に関する手続が行われたこと（犯罪の経歴を除く。） （政令第 2 条第 4 号関係）</p> <p>本人を被疑者又は被告人として刑事事件に関する手続が行われたという事実が該当する。他人を被疑者とする犯罪捜査のために取調べを受けた事実や、証人として尋問を受けた事実に関する情報は、本人を被疑者又は被告人としていないことから、これには該当しない。</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>(11) 本人を少年法（昭和 23 年法律第 168 号）第 3 条第 1 項に規定する少年又はその疑いのある者として、調査、観護の措置、審判、保護処分その他の少年の保護事件に関する手続が行われたこと（政令第 2 条第 5 号関係） 本人を非行少年又はその疑いのある者として、保護処分等の少年の保護事件に関する手続が行われたという事実が該当する。</p> <p>（※）遺伝子検査により判明する情報の中には、差別、偏見につながり得るもの（例：将来発症し得る可能性のある病気、治療薬の選択に関する情報等）が含まれ得るが、当該情報は、「本人に対して医師その他医療に関連する職務に従事する者により行われた疾病の予防及び早期発見のための健康診断その他の検査の結果」（政令第 2 条第 2 号関係）又は「健康診断等の結果に基づき、又は疾病、負傷その他の心身の変化を理由として、本人に対して医師等により心身の状態の改善のための指導又は診療若しくは調剤が行われたこと」（政令第 2 条第 3 号関係）に該当し得る。</p> <p>2-4 個人情報データベース等（法第 2 条第 4 項関係） 「個人情報データベース等」とは、特定の個人情報をコンピュータを用いて検索することができるように体系的に構成した、個人情報を含む情報の集合物をいう。また、コンピュータを用いていない場合であっても、紙面で処理した個人情報を一定の規則（例えば、五十音順等）に従って整理・分類し、特定の個人情報を容易に検索することができるよう、目次、索引、符号等を付し、他人によっても容易に検索可能な状態に置いているものも該当する。 ただし、次の(1)から(3)までのいずれにも該当するものは、利用方法からみて個人の権利利益を害するおそれが少ないため、個人情報データベース等には該当しない。</p> <p>(1) 不特定かつ多数の者に販売することを目的として発行されたものであって、かつ、その発行が法又は法に基づく命令の規定に違反して行われたものでないこと。</p>	<p>＜法第 2 条第 4 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>(2) 不特定かつ多数の者により随時に購入することができ、又はできたものであること。</p> <p>(3) 生存する個人に関する他の情報を加えることなくその本来の用途に供しているものであること。</p> <p><b>【個人情報データベース等に該当する事例】</b></p> <p>事例 1) 電子メールソフトに保管されているメールアドレス帳（メールアドレスと氏名を組み合わせた情報を入力している場合）</p> <p>事例 2) インターネットサービスにおいて、ユーザーが利用したサービスに係るログ情報がユーザーID によって整理され保管されている電子ファイル（ユーザーID と個人情報を容易に照合することができる場合）</p> <p>事例 3) 従業者が、名刺の情報を業務用パソコン（所有者を問わない。）の表計算ソフト等を用いて入力・整理している場合</p> <p>事例 4) 人材派遣会社が登録カードを、氏名の五十音順に整理し、五十音順のインデックスを付してファイルしている場合</p> <p><b>【個人情報データベース等に該当しない事例】</b></p> <p>事例 1) 従業者が、自己の名刺入れについて他人が自由に閲覧できる状況に置いていても、他人には容易に検索できない独自の分類方法により名刺を分類した状態である場合</p> <p>事例 2) アンケートの戻りはがきが、氏名、住所等により分類整理されていない状態である場合</p> <p>事例 3) 市販の電話帳、住宅地図、職員録、カーナビゲーションシステム等</p> <p>2-5 個人情報取扱事業者（法第 2 条第 5 項関係） 「個人情報取扱事業者」とは、個人情報データベース等を事業の用に供している者のうち、国の機関、地方公共団体、独立行政法人等の保有する個人</p>	<p>＜法第 2 条第 5 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>情報の保護に関する法律（平成 15 年法律第 59 号）で定める独立行政法人等及び地方独立行政法人法（平成 15 年法律第 118 号）で定める地方独立行政法人を除いた者をいう。</p> <p>ここでいう「事業の用に供している」の「事業」とは、一定の目的をもって反復継続して遂行される同種の行為であって、かつ社会通念上事業と認められるものをいい、営利・非営利の別は問わない。</p> <p>また、個人情報データベース等を事業の用に供している者であれば、当該個人情報データベース等を構成する個人情報によって識別される特定の個人の数の多寡にかかわらず、個人情報取扱事業者に該当する。</p> <p>なお、法人格のない、権利能力のない社団（任意団体）又は個人であっても、個人情報データベース等を事業の用に供している場合は個人情報取扱事業者に該当する。</p> <p>2-6 個人データ（法第 2 条第 6 項関係）</p> <p>「個人データ」とは、個人情報取扱事業者が管理する「個人情報データベース等」を構成する個人情報をいう。</p> <p>なお、法第 2 条第 4 項及び政令第 3 条第 1 項に基づき、利用方法からみて個人の権利利益を害するおそれが少ないため、個人情報データベース等から除かれているもの（例：市販の電話帳・住宅地図等）を構成する個人情報は、個人データに該当しない（2-4（個人情報データベース等）参照）。</p> <p>【個人データに該当する事例】</p> <p>事例 1）個人情報データベース等から外部記録媒体に保存された個人情報 事例 2）個人情報データベース等から紙面に出力された帳票等に印字された個人情報</p> <p>【個人データに該当しない事例】</p> <p>事例）個人情報データベース等を構成する前の入力用の帳票等に記載されている個人情報</p>	<p>＜法第 2 条第 6 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>



<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>2-7 保有個人データ（法第 2 条第 7 項関係）</p> <p>「保有個人データ」（※ 1）とは、個人情報取扱事業者が、本人又はその代理人から請求される開示、内容の訂正、追加又は削除、利用の停止、消去及び第三者への提供の停止の全て（以下「開示等」という。）に応じることができる権限を有する（※ 2）「個人データ」をいう。</p> <p>ただし、個人データのうち、次に掲げるもの又は 6 か月以内に消去する（更新することは除く。）こととなるものは、「保有個人データ」ではない。</p> <p>(1) 当該個人データの存否が明らかになることにより、本人又は第三者の生命、身体又は財産に危害が及ぶおそれがあるもの。 事例) 家庭内暴力、児童虐待の被害者の支援団体が保有している、加害者（配偶者又は親権者）及び被害者（配偶者又は子）を本人とする個人データ</p> <p>(2) 当該個人データの存否が明らかになることにより、違法又は不当な行為を助長し、又は誘発するおそれがあるもの。 事例 1) 暴力団等の反社会的勢力による不当要求の被害等を防止するために事業者が保有している、当該反社会的勢力に該当する人物を本人とする個人データ 事例 2) 不審者や悪質なクレマー等による不当要求の被害を防止するために事業者が保有している、当該行為を行った者を本人とする個人データ</p> <p>(3) 当該個人データの存否が明らかになることにより、国の安全が害されるおそれ、他国若しくは国際機関との信頼関係が損なわれるおそれ又は他国若しくは国際機関との交渉上不利益を被るおそれがあるもの。 事例 1) 製造業者、情報サービス事業者等が保有している、防衛に関連</p>	<p>＜法第 2 条第 7 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>する兵器・設備・機器・ソフトウェア等の設計又は開発の担当者 名が記録された、当該担当者を本人とする個人データ</p> <p>事例 2) 要人の訪問先やその警備会社が保有している、当該要人を本人とする行動予定等の個人データ</p> <p>(4) 当該個人データの存否が明らかになることにより、犯罪の予防、鎮圧又は捜査その他の公共安全と秩序の維持に支障が及ぶおそれがあるもの。</p> <p>事例 1) 警察から捜査関係事項照会等がなされることにより初めて取得した個人データ</p> <p>事例 2) 警察から契約者情報等について捜査関係事項照会等を受けた事業者が、その対応の過程で作成した照会受理簿・回答発信簿、照会対象者リスト等の個人データ（※なお、当該契約者情報自体は「保有個人データ」に該当する。</p> <p>事例 3) 犯罪による収益の移転防止に関する法律（平成 19 年法律第 22 号）第 8 条第 1 項に基づく疑わしい取引（以下「疑わしい取引」という。）の届出の有無及び届出に際して新たに作成した個人データ</p> <p>事例 4) 振り込め詐欺に利用された口座に関する情報に含まれる個人データ</p> <p>(※ 1) 法は、「個人情報」(2-1 (個人情報) 参照)、「個人データ」(2-6 (個人データ) 参照)、「保有個人データ」、「要配慮個人情報」(2-3 (要配慮個人情報) 参照)、「匿名加工情報」(2-8 (匿名加工情報) 参照)等の語を使い分けており、個人情報取扱事業者等に課される義務はそれぞれ異なるので、注意を要する。</p> <p>(※ 2) 開示等の具体的な対応が必要となる場合等については、3-5-2 (保有個人データの開示) 以降を参照のこと。なお、個人データの取扱いについて、委託等により複数の個人情報取扱事業者が関わる場合には、</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>契約等の実態によって、どの個人情報取扱事業者が開示等に応じる権限を有しているのかについて判断することとなる。</p> <p>2-8 匿名加工情報（法第 2 条第 9 項関係） 匿名加工情報の定義については、別途定める「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（匿名加工情報編）」を参照のこと。</p> <p>2-9 匿名加工情報取扱事業者（法第 2 条第 10 項関係） 匿名加工情報取扱事業者の定義については、別途定める「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（匿名加工情報編）」を参照のこと。</p> <p>2-10 「本人に通知」 「本人に通知」とは、本人に直接知らしめることをいい、事業の性質及び個人情報の取扱状況に応じ、内容が本人に認識される合理的かつ適切な方法によらなければならない。</p> <p><b>【本人への通知に該当する事例】</b> 事例 1）ちらし等の文書を直接渡すことにより知らせること。 事例 2）口頭又は自動応答装置等で知らせること。 事例 3）電子メール、FAX 等により送信し、又は文書を郵便等で送付することにより知らせること。</p> <p>2-11 「公表」 「公表」とは、広く一般に自己の意思を知らせること（不特定多数の人々が知ることができるように発表すること）をいい、公表に当たっては、事業の性質及び個人情報の取扱状況に応じ、合理的かつ適切な方法によらなければならない。</p>	<p>＜法第 2 条第 9 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p> <p>＜法第 2 条第 10 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p> <p>＜「本人に通知」は、原則として通則ガイドラインの例によるが、金融分野ガイドライン第 6 条第 1 項等に留意する。＞</p> <p>＜「公表」は、原則として通則ガイドラインの例によるが、金融分野ガイドライン第 6 条第 1 項等に留意する。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p><b>【公表に該当する事例】</b></p> <p>事例 1) 自社のホームページのトップページから 1 回程度の操作で到達できる場所への掲載</p> <p>事例 2) 自社の店舗や事務所等、顧客が訪れることが想定される場所におけるポスター等の掲示、パンフレット等の備置き・配布</p> <p>事例 3)（通信販売の場合）通信販売用のパンフレット・カタログ等への掲載</p> <p>2-12 「本人の同意」</p> <p>「本人の同意」とは、本人の個人情報が、個人情報取扱事業者によって示された取扱方法で取り扱われることを承諾する旨の当該本人の意思表示をいう（当該本人であることを確認できていることが前提となる。）。</p> <p>また、「本人の同意を得（る）」とは、本人の承諾する旨の意思表示を当該個人情報取扱事業者が認識することをいい、事業の性質及び個人情報の取扱状況に応じ、本人が同意に係る判断を行うために必要と考えられる合理的かつ適切な方法によらなければならない。</p> <p>なお、個人情報の取扱いに関して同意したことによって生ずる結果について、未成年者、成年被後見人、被保佐人及び被補助人が判断できる能力を有していないなどの場合は、親権者や法定代理人等から同意を得る必要がある。</p> <p><b>【本人の同意を得ている事例】</b></p> <p>事例 1) 本人からの同意する旨の口頭による意思表示</p> <p>事例 2) 本人からの同意する旨の書面（電磁的記録を含む。）の受領</p> <p>事例 3) 本人からの同意する旨のメールの受信</p> <p>事例 4) 本人による同意する旨の確認欄へのチェック</p> <p>事例 5) 本人による同意する旨のホームページ上のボタンのクリック</p>	<p>第 3 条 同意の形式（法第 16 条、第 23 条及び第 24 条関係）</p> <p>以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p> <p>金融分野における個人情報取扱事業者は、法第 16 条、第 23 条及び第 24 条に定める本人の同意を得る場合には、原則として、書面（電磁的記録を含む。以下同じ。）によることとする。</p> <p>なお、事業者があらかじめ作成された同意書面を用いる場合には、文字の大きさ及び文章の表現を変えること等により、個人情報の取扱いに関する条項が他と明確に区別され、本人に理解されることが望ましい。または、あらかじめ作成された同意書面に確認欄を設け本人がチェックを行うこと等、本人の意思が明確に反映できる方法により確認を行うことが望ましい。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>事例 6）本人による同意する旨の音声入力、タッチパネルへのタッチ、ボタンやスイッチ等による入力</p> <p>2-13 「提供」</p> <p>「提供」とは、個人データ、保有個人データ又は匿名加工情報（以下この項において「個人データ等」という。）を、自己以外の者が利用可能な状態に置くことをいう。個人データ等が、物理的に提供されていない場合であっても、ネットワーク等を利用することにより、個人データ等を利用できる状態にあれば（利用する権限が与えられていれば）、「提供」に当たる。</p>	<p>＜「提供」は、通則ガイドラインの例による。＞</p>
<p>3 個人情報取扱事業者等の義務</p> <p>3-1 個人情報の利用目的（法第 15 条～第 16 条、第 18 条第 3 項関係）</p> <p>3-1-1 利用目的の特定（法第 15 条第 1 項関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、個人情報を取り扱うに当たっては、利用目的をできる限り具体的に特定しなければならないが、利用目的の特定に当たっては、利用目的を単に抽象的、一般的に特定するのではなく、個人情報が個人情報取扱事業者において、最終的にどのような事業の用に供され、どのような目的で個人情報を利用されるのかが、本人にとって一般的かつ合理的に想定できる程度に具体的に特定することが望ましい（※）。</p> <p>なお、あらかじめ、個人情報を第三者に提供することを想定している場合には、利用目的の特定に当たっては、その旨が明確に分かるよう特定しなければならない（3-4-1（第三者提供の制限の原則）参照）。</p> <p>【具体的に利用目的を特定している事例】</p> <p>事例）事業者が商品の販売に伴い、個人から氏名・住所・メールアドレス等を取得するに当たり、「〇〇事業における商品の発送、関連するアフ</p>	<p>第 2 条 利用目的の特定（法第 15 条関係）</p> <p>以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p> <p>1 金融分野における個人情報取扱事業者が、法第 15 条に従い利用目的を特定するに際して、「自社の所要の目的で用いる」といった抽象的な利用目的では「できる限り特定」したものとはならない。利用目的は、提供する金融商品又はサービスを示した上で特定することが望ましく、次に掲げる例が考えられる。</p> <p>（例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 当社の預金の受入れ</li> <li>・ 当社の与信判断・与信後の管理</li> </ul>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>ターサービス、新商品・サービスに関する情報のお知らせのために利用いたします。」等の利用目的を明示している場合</p> <p>【具体的に利用目的を特定していない事例】 事例 1) 「事業活動に用いるため」 事例 2) 「マーケティング活動に用いるため」</p> <p>(※) 定款等に規定されている事業の内容に照らして、個人情報によって識別される本人からみて、自分の個人情報が利用される範囲が合理的に予想できる程度に特定されている場合や業種を明示することで利用目的の範囲が想定される場合には、これで足りるとされることもあり得るが、多くの場合、業種の明示だけでは利用目的をできる限り具体的に特定したことにはならないと解される。なお、利用目的の特定に当たり「〇〇事業」のように事業を明示する場合についても、社会通念上、本人からみてその特定に資すると認められる範囲に特定することが望ましい。</p> <p>また、単に「事業活動」、「お客様のサービスの向上」等のように抽象的、一般的な内容を利用目的とすることは、できる限り具体的に特定したことにはならないと解される。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 当社の保険の引受け、保険金・給付金の支払い</li> <li>・ 当社又は関連会社・提携会社の金融商品・サービスの販売・勧誘</li> <li>・ 当社又は関連会社・提携会社の保険の募集</li> <li>・ 当社内部における市場調査及び金融商品・サービスの開発・研究</li> <li>・ 特定の金融商品・サービスの購入に際しての資格の確認</li> </ul> <p>2 金融分野における個人情報取扱事業者は、特定の個人情報の利用目的が、法令等に基づき限定されている場合には、その旨を明示することとする。</p> <p>3 金融分野における個人情報取扱事業者が、与信事業に際して、個人情報を取得する場合においては、利用目的について本人の同意を得ることとし、契約書等における利用目的は他の契約条項等と明確に分離して記載することとする。この場合、事業者は取引上の優越的な地位を不当に利用し、与信の条件として、与信事業において取得した個人情報を当該事業以外の金融商品</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>3-1-2 利用目的の変更（法第 15 条第 2 項、第 18 条第 3 項関係）</p> <p>上記 3-1-1（利用目的の特定）により特定した利用目的は、変更前の利用目的と関連性を有すると合理的に認められる範囲、すなわち、変更後の利用目的が変更前の利用目的からみて、社会通念上、本人が通常予期し得る限度と客観的に認められる範囲内（※ 1）で変更することは可能である。変更された利用目的は、本人に通知（※ 2）するか、又は公表（※ 3）しなければならない。</p> <p>なお、特定された利用目的（法第 15 条第 2 項に定める範囲で変更された利用目的を含む。）の達成に必要な範囲を超えて個人情報を取り扱う場合は、法第 16 条第 1 項に従って本人の同意を得なければならない。ただし、本人の身体等の保護のために必要があり、かつ本人の同意を得ることが困難である場合等、法第 16 条第 3 項各号に掲げる場合には、あらかじめ本人の同意を得ることなく、特定された利用目的の達成に必要な範囲を超えて、個人情報を取り扱うことができる（3-1-5（利用目的による制限の例外）参照）。</p> <p>（※ 1）「本人が通常予期し得る限度と客観的に認められる範囲」とは、本人の主観や事業者の恣意的な判断によるものではなく、一般人の判断において、当初の利用目的と変更後の利用目的を比較して予期できる範囲をいい、当初特定した利用目的とどの程度の関連性を有するかを</p>	<p>のダイレクトメールの発送等に利用することを利用目的として同意させる行為を行うべきではなく、本人は当該ダイレクトメールの発送等に係る利用目的を拒否することができる。</p> <p>4 金融分野における個人情報取扱事業者が、与信事業に際して、個人情報を個人信用情報機関（個人の返済能力に関する情報の収集及び与信事業を行う個人情報取扱事業者に対する当該情報の提供を業とするものという。以下同じ。）に提供する場合には、その旨を利用目的に明示しなければならない。さらに、明示した利用目的について本人の同意を得ることとする。</p> <p>5 法第 15 条第 2 項に定める「変更前の利用目的と関連性を有すると合理的に認められる範囲」については、次に掲げる例が考えられる。</p> <p>（許容例） 「商品案内等を郵送」→「商品案内等をメール送付」</p> <p>（認められない例） 「アンケート集計に利用」→「商品案内等の郵送に利用」</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>総合的に勘案して判断される。</p> <p>（※ 2）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p> <p>（※ 3）「公表」については、2-11（公表）を参照のこと。</p>	
<p>3-1-3 利用目的による制限（法第16条第1項関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、法第 15 条第 1 項により特定した利用目的の達成に必要な範囲を超えて、個人情報を取り扱う場合は、あらかじめ本人の同意（※）を得なければならない。</p> <p>ただし、当該同意を得るために個人情報を利用すること（メールの送信や電話をかけること等）は、当初特定した利用目的として記載されていない場合でも、目的外利用には該当しない。</p> <p>（※）「本人の同意」については、2-12（本人の同意）を参照のこと。</p> <p>3-1-4 事業の承継（法第16条第2項関係）</p> <p>個人情報取扱事業者が、合併、分社化、事業譲渡等により他の個人情報取扱事業者から事業の承継をすることに伴って個人情報を取得した場合であって、当該個人情報に係る承継前の利用目的の達成に必要な範囲内で取り扱う場合は目的外利用にはならず、本人の同意（※）を得る必要はない。</p> <p>なお、事業の承継後に、承継前の利用目的の達成に必要な範囲を超えて、個人情報を取り扱う場合は、あらかじめ本人の同意を得る必要があるが、当該同意を得るために個人情報を利用すること（メールの送信や電話をかけること等）は、承継前の利用目的として記載されていない場合でも、目的外利用には該当しない。</p>	<p>第 4 条 利用目的による制限（法第 16 条関係）</p> <p>以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p>



<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>（※）「本人の同意」については、2-12（本人の同意）を参照のこと。</p> <p>3-1-5 利用目的による制限の例外（法第16条第3項関係） 次に掲げる場合については、法第 16 条第 1 項及び第 2 項において、特定された利用目的の達成に必要な範囲を超えて個人情報を取り扱うに当たり本人の同意（※）を得ることが求められる場合であっても、当該同意は不要である。</p> <p>（※）「本人の同意」については、2-12（本人の同意）を参照のこと。</p> <p>(1) 法令に基づく場合（法 16 条第 3 項第 1 号関係） 法令に基づく場合は、法第 16 条第 1 項又は第 2 項の適用を受けず、あらかじめ本人の同意を得ることなく、特定された利用目的の達成に必要な範囲を超えて個人情報を取り扱うことができる。</p> <p>事例 1）警察の捜査関係事項照会に対応する場合（刑事訴訟法（昭和 23 年法律第 131 号）第 197 条第 2 項）</p> <p>事例 2）裁判官の発する令状に基づく捜査に対応する場合（刑事訴訟法第 218 条）</p> <p>事例 3）税務署の所得税等に関する調査に対応する場合（国税通則法（昭和 37 年法律第 66 号）第 74 条の 2 他）</p> <p>事例 4）製造・輸入事業者が消費生活用製品安全法（昭和 48 年法律第 31 号）第 39 条第 1 項の規定による命令（危害防止命令）を受けて製品の回収等の措置をとる際に、販売事業者が、同法第 38 条第 3 項の規定に基づき製品の購入者等の情報を当該製造・輸入事業者に提供する場合</p> <p>事例 5）弁護士会からの照会に対応する場合（弁護士法（昭和 24 年法律第 205 号）第 23 条の 2）</p>	<p>法第 16 条第 3 項の場合の例としては、通則ガイドライン 3-1-5（利用目的による制限の例外）に掲げている場合以外に、次に掲げる場合が考えられる。</p> <p>① 法令に基づく場合 （例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 犯罪による収益の移転防止に関する法律（平成 19 年法律第 22 号）第 8 条第 1 項に基づき疑わしい取引を届け出る場合</li> <li>・ 金融商品取引法（昭和 23 年法律第 25 号）第 210 条、第 211 条等に基づく証券取引等監視委員会の職員による犯則事件の調査に応じる場合</li> </ul> <p>なお、法令に、第三者が個人情報の提供を求めることができる旨の規定はあるが、正当な事由に基づきそれに応じないことができる場合には、金融分野における個人情報取扱事業者は、当該法令の趣旨に照らして目的外利用の必要性和合理性が認められる範囲内で対応するよう留意する。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>(2) 人の生命、身体又は財産の保護のために必要がある場合であって、本人の同意を得ることが困難であるとき（法第 16 条第 3 項第 2 号関係）</p> <p>人（法人を含む。）の生命、身体又は財産といった具体的な権利利益の保護が必要であり、かつ、本人の同意を得ることが困難である場合は、法第 16 条第 1 項又は第 2 項の適用を受けず、あらかじめ本人の同意を得ることなく、特定された利用目的の達成に必要な範囲を超えて個人情報を取り扱うことができる。</p> <p>事例 1）急病その他の事態が生じたときに、本人について、その血液型や家族の連絡先等を医師や看護師に提供する場合</p> <p>事例 2）大規模災害や事故等の緊急時に、被災者情報・負傷者情報等を家族、行政機関、地方自治体等に提供する場合</p> <p>事例 3）事業者間において、暴力団等の反社会的勢力情報、振り込め詐欺に利用された口座に関する情報、意図的に業務妨害を行う者の情報について共有する場合</p> <p>事例 4）製造した商品に関連して事故が生じたため、又は、事故は生じていないが、人の生命若しくは身体に危害を及ぼす急迫した危険が存在するため、当該商品の製造事業者等が当該商品をリコールする場合、販売事業者、修理事業者又は設置工事事業者等が当該製造事業者等に対して、当該商品の購入者等の情報を提供する場合</p> <p>事例 5）上記事例 4 のほか、商品に重大な欠陥があり人の生命、身体又は財産の保護が必要となるような緊急時に、製造事業者から顧客情報の提供を求められ、これに応じる必要がある場合</p> <p>事例 6）不正送金等の金融犯罪被害の事実に関する情報を、関連する犯罪被害の防止のために、他の事業者を提供する場合</p> <p>(3) 公衆衛生の向上又は児童の健全な育成の推進のために特に必要がある場合であって、本人の同意を得ることが困難であるとき（法第 16 条第 3 項</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>第 3 号関係）</p> <p>公衆衛生の向上又は心身の発達途上にある児童の健全な育成のために特に必要があり、かつ、本人の同意を得ることが困難である場合は、法第 16 条第 1 項又は第 2 項の適用を受けず、あらかじめ本人の同意を得ることなく、特定された利用目的の達成に必要な範囲を超えて個人情報を取り扱うことができる。</p> <p>事例 1）健康保険組合等の保険者等が実施する健康診断の結果等に係る情報を、健康増進施策の立案、保健事業の効果の向上、疫学調査等に利用する場合（なお、法第 76 条第 1 項第 3 号に該当する場合は、第 4 章の各規定は適用されない。）</p> <p>事例 2）児童生徒の不登校や不良行為等について、児童相談所、学校、医療機関等の関係機関が連携して対応するために、当該関係機関等の中で当該児童生徒の情報を交換する場合</p> <p>事例 3）児童虐待のおそれのある家庭情報を、児童相談所、警察、学校、病院等が共有する必要がある場合</p> <p>(4) 国の機関若しくは地方公共団体又はその委託を受けた者が法令の定める事務を遂行することに対して、事業者が協力する必要がある場合であって、本人の同意を得ることにより当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがあるとき（法第 16 条第 3 項第 4 号関係）</p> <p>国の機関等（地方公共団体又はその委託を受けた者を含む。）が法令の定める事務を実施する上で、民間企業等の協力を得る必要があり、かつ、本人の同意を得ることが当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがあると認められる場合は、当該民間企業等は、法第 16 条第 1 項又は第 2 項の適用を受けず、あらかじめ本人の同意を得ることなく、特定された利用目的の達成に必要な範囲を超えて個人情報を取り扱うことができる。</p> <p>事例 1）事業者が税務署又は税関の職員等の任意の求めに応じて個人情報を提出する場合</p>	<p>② 国の機関若しくは地方公共団体又はその委託を受けた者が法令の定める事務を遂行することに対して協力する必要がある場合であって、本人の同意を得ることにより当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがあるとき。</p> <p>（例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 振り込め詐欺に利用された口座に関する情報を警察に提供する場合 なお、金融分野における個人情報取扱事業者は、任意の求めの趣旨に照らして目的外利用の必要性和合理性が認められる範囲内で対応するよう留意する。</li> </ul>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>事例 2）事業者が警察の任意の求めに応じて個人情報を提出する場合 事例 3）一般統計調査や地方公共団体が行う統計調査に回答する場合</p>	
<p>3-2 個人情報の取得（法第 17 条・第 18 条関係） 3-2-1 適正取得（法第 17 条第 1 項関係） 個人情報取扱事業者は、偽り等の不正の手段により個人情報を取得（※ 1）してはならない（※ 2）。</p> <p>【個人情報取扱事業者が不正の手段により個人情報を取得している事例】 事例 1）十分な判断能力を有していない子供や障害者から、取得状況から考えて関係のない家族の収入事情などの家族の個人情報を、家族の同意なく取得する場合 事例 2）法第 23 条第 1 項に規定する第三者提供制限違反をするよう強要して個人情報を取得する場合 事例 3）個人情報を取得する主体や利用目的等について、意図的に虚偽の情報を示して、本人から個人情報を取得する場合 事例 4）他の事業者に指示して不正の手段で個人情報を取得させ、当該他の事業者から個人情報を取得する場合 事例 5）法第 23 条第 1 項に規定する第三者提供制限違反がされようとしていることを知り、又は容易に知ることができるにもかかわらず、個人情報を取得する場合 事例 6）不正の手段で個人情報が取得されたことを知り、又は容易に知ることができるにもかかわらず、当該個人情報を取得する場合</p> <p>（※ 1）個人情報を含む情報がインターネット等により公にされている場合であって、単にこれを閲覧するにすぎず、転記等を行わない場合は、個人情報を取得しているとは解されない。 （※ 2）個人情報取扱事業者若しくはその従業者又はこれらであった者が、</p>	<p>＜法第 17 条第 1 項関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>その業務に関して取り扱った個人情報データベース等（その全部又は一部を複製し、又は加工したものを含む。）を自己若しくは第三者の不正な利益を図る目的で提供し、又は盗用したときは、法第 83 条により刑事罰（1 年以下の懲役又は 50 万円以下の罰金）が科され得る。</p> <p>3-2-2 要配慮個人情報の取得（法第 17 条第 2 項関係）</p> <p>要配慮個人情報（※1）を取得する場合には、あらかじめ本人の同意（※2）を得なければならない。ただし、次の(1)から(7)までに掲げる場合には、本人の同意を得る必要はない。</p> <p>(1) 法令に基づく場合（法第 17 条第 2 項第 1 号関係）</p> <p>法令に基づく場合は、あらかじめ本人の同意を得ることなく、要配慮個人情報を取得することができる。なお、具体的な事例は、3-1-5（利用目的による制限の例外）に示すもののほか、次の事例も該当する。</p> <p>事例）個人情報取扱事業者が、労働安全衛生法に基づき健康診断を実施し、これにより従業員の身体状況、病状、治療等の情報を健康診断実施機関から取得する場合</p> <p>(2) 人の生命、身体又は財産の保護のために必要がある場合であって、本人の同意を得ることが困難であるとき（法第 17 条第 2 項第 2 号関係）</p> <p>人（法人を含む。）の生命、身体又は財産といった具体的な権利利益の保護が必要であり、かつ、本人の同意を得ることが困難である場合は、あらかじめ本人の同意を得ることなく、要配慮個人情報を取得することができる。</p> <p>事例 1）急病その他の事態が生じたときに、本人の病歴等を医師や看護師が家族から聴取する場合</p> <p>事例 2）事業者間において、不正対策等のために、暴力団等の反社会的勢力情報、意図的に業務妨害を行う者の情報のうち、過去に業務妨害罪で逮捕された事実等の情報について共有する場合</p>	<p>＜法第 17 条第 2 項関係は、原則として通則ガイドラインの例によるが、金融分野ガイドライン第 5 条に留意する。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>事例 3）不正送金等の金融犯罪被害の事実に関する情報を、関連する犯罪被害の防止のために、他の事業者から取得する場合</p> <p>(3) 公衆衛生の向上又は児童の健全な育成の推進のために特に必要がある場合であって、本人の同意を得ることが困難であるとき（法第 17 条第 2 項第 3 号関係）</p> <p>公衆衛生の向上又は心身の発達途上にある児童の健全な育成のために特に必要があり、かつ、本人の同意を得ることが困難である場合は、あらかじめ本人の同意を得ることなく、要配慮個人情報を取得することができる。</p> <p>事例 1）健康保険組合等の保険者等が実施する健康診断等の結果判明した病名等について、健康増進施策の立案や保健事業の効果の向上を目的として疫学調査等のために提供を受けて取得する場合（なお、法第 76 条第 1 項第 3 号に該当する場合は、第 4 章の各規定は適用されない。）</p> <p>事例 2）児童生徒の不登校や不良行為等について、児童相談所、学校、医療機関等の関係機関が連携して対応するために、ある関係機関において、他の関係機関から当該児童生徒の保護事件に関する手続が行われた情報を取得する場合</p> <p>事例 3）児童虐待のおそれのある家庭情報のうち被害を被った事実に係る情報を、児童相談所、警察、学校、病院等の関係機関が、他の関係機関から取得する場合</p> <p>(4) 国の機関若しくは地方公共団体又はその委託を受けた者が法令の定める事務を遂行することに対して、事業者が協力する必要がある場合であって、本人の同意を得ることにより当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがあるとき（法第 17 条第 2 項第 4 号関係）</p> <p>国の機関等（地方公共団体又はその委託を受けた者を含む。）が法令の定</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>める事務を実施する上で、民間企業等の協力を得る必要があり、かつ、本人の同意を得ることが当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがあると認められる場合は、当該民間企業等は、あらかじめ本人の同意を得ることなく、要配慮個人情報を取得することができる。</p> <p>事例）事業者が警察の任意の求めに応じて要配慮個人情報に該当する個人情報を提出するために、当該個人情報を取得する場合</p> <p>(5) 当該要配慮個人情報が、本人、国の機関、地方公共団体、法第 76 条第 1 項各号に掲げる者その他個人情報保護委員会規則で定める者により公開されている場合（法第 17 条第 2 項第 5 号、規則第 6 条関係）</p> <p>要配慮個人情報が、次に掲げる者により公開されている場合は、あらかじめ本人の同意を得ることなく、当該公開されている要配慮個人情報を取得することができる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 本人</li> <li>② 国の機関</li> <li>③ 地方公共団体</li> <li>④ 放送機関・新聞社・通信社その他の報道機関（報道を業として行う個人を含む。）</li> <li>⑤ 著述を業として行う者</li> <li>⑥ 大学その他の学術研究を目的とする機関若しくは団体又はそれらに属する者</li> <li>⑦ 宗教団体</li> <li>⑧ 政治団体</li> <li>⑨ 外国政府、外国の政府機関、外国の地方公共団体又は国際機関</li> <li>⑩ 外国において法第 76 条第 1 項各号に掲げる者に相当する者</li> </ol> <p>(6) 本人を目視し、又は撮影することにより、その外形上明らかな要配慮個人情報を取得する場合（法第 17 条第 2 項第 6 号、政令第 7 条第 1 号関係）</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>本人の意思にかかわらず、本人の外形上の特徴により、要配慮個人情報に含まれる事項（例：身体障害等）が明らかであるときは、あらかじめ本人の同意を得ることなく、当該要配慮個人情報を取得することができる。</p> <p>事例）身体の不自由な方が店舗に来店し、対応した店員がその旨をお客様対応録等に記録した場合（目視による取得）や、身体の不自由な方が店舗に設置された防犯カメラに映りこんだ場合（撮影による取得）</p> <p>(7) 法第 23 条第 5 項各号に掲げる場合において、個人データである要配慮個人情報の提供を受けるとき（法第 17 条第 2 項第 6 号、政令第 7 条第 2 号関係）</p> <p>要配慮個人情報を、法第 23 条第 5 項各号に定める委託、事業承継又は共同利用により取得する場合は、あらかじめ本人の同意を得る必要はない。</p> <p>【法第 17 条第 2 項に違反している事例】</p> <p>本人の同意を得ることなく、法第 17 条第 2 項第 5 号及び規則第 6 条で定める者以外がインターネット上で公開している情報から本人の信条や犯罪歴等に関する情報を取得し、既に保有している当該本人に関する情報の一部として自己のデータベース等に登録すること。</p> <p>(※ 1) 「要配慮個人情報」については、2-3（要配慮個人情報）を参照のこと。なお、要配慮個人情報の第三者提供には、原則として本人の同意が必要であり、オプトアウトによる第三者提供は認められていないので、注意が必要である（3-4-1（第三者提供の制限の原則）、3-4-2（オプトアウトによる第三者提供）参照）。</p> <p>(※ 2) 「本人の同意」については、2-12（本人の同意）を参照のこと。なお、個人情報取扱事業者が要配慮個人情報を書面又は口頭等により本人から適正に直接取得する場合は、本人が当該情報を提供したことをも</p>	



<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>って、当該個人情報取扱事業者が当該情報を取得することについて本人の同意があったものと解される。</p> <p>また、個人情報取扱事業者が要配慮個人情報を第三者提供の方法により取得した場合、提供元が法第 17 条第 2 項及び法第 23 条第 1 項に基づいて本人から必要な同意（要配慮個人情報の取得及び第三者提供に関する同意）を取得していることが前提となるため、提供を受けた当該個人情報取扱事業者が、改めて本人から法第 17 条第 2 項に基づく同意を得る必要はないものと解される。</p> <p>＜要配慮個人情報については、原則として通則ガイドラインの例によるが、金融分野ガイドライン第 5 条に留意する。＞</p>	<p>第 5 条 機微（センシティブ）情報</p> <p>1 金融分野における個人情報取扱事業者は、法第 2 条第 3 項に定める要配慮個人情報並びに労働組合への加盟、門地、本籍地、保健医療及び性生活（これらのうち要配慮個人情報に該当するものを除く。）に関する情報（本人、国の機関、地方公共団体、法第 76 条第 1 項各号若しくは施行規則第 6 条各号に掲げる者により公開されているもの、又は、本人を目視し、若しくは撮影することにより取得するその外形上明らかなものを除く。以下「機微（センシティブ）情報」という。）については、次に掲げる場合を除くほか、取得、利用又は第三者提供を行わないこととする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 法令等に基づく場合</li> <li>② 人の生命、身体又は財産の保護のために必要がある場合</li> <li>③ 公衆衛生の向上又は児童の健全な育成の推進のため特に必要がある場合</li> <li>④ 国の機関若しくは地方公共団体又はその委託を受けた者が法令の定める事務を遂行することに対して協力する必要がある場合</li> <li>⑤ 源泉徴収事務等の遂行上必要な範囲において、政治・宗教等の団体若しくは労働組合への所属若しくは加盟に関する従業員等の機微（センシティブ）情報を取得、利用又は第三者提供する場合</li> <li>⑥ 相続手続による権利義務の移転等の遂行に必要な限りにおいて、機微</li> </ol>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>3-2-3 利用目的の通知又は公表（法第 18 条第 1 項関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、個人情報を取得する場合は、あらかじめその利用目的を公表（※ 1）していることが望ましい。公表していない場合は、取得後速やかに、その利用目的を、本人に通知（※ 2）するか、又は公表しなければならない。</p>	<p>（センシティブ）情報を取得、利用又は第三者提供する場合</p> <p>⑦ 保険業その他金融分野の事業の適切な業務運営を確保する必要性から、本人の同意に基づき業務遂行上必要な範囲で機微（センシティブ）情報を取得、利用又は第三者提供する場合</p> <p>⑧ 機微（センシティブ）情報に該当する生体認証情報を本人の同意に基づき、本人確認に用いる場合</p> <p>2 金融分野における個人情報取扱事業者は、機微（センシティブ）情報を、前項に掲げる場合に取得、利用又は第三者提供する場合には、同項に掲げる事由を逸脱した取得、利用又は第三者提供を行うことのないよう、特に慎重に取り扱うこととする。</p> <p>3 金融分野における個人情報取扱事業者は、機微（センシティブ）情報を、第 1 項に掲げる場合に取得、利用又は第三者提供する場合には、例えば、要配慮個人情報を取得するに当たっては、法第 17 条第 2 項に従い、あらかじめ本人の同意を得なければならないとされていることなど、個人情報の保護に関する法令等に従い適切に対応しなければならないことに留意する。</p> <p>4 金融分野における個人情報取扱事業者は、機微（センシティブ）情報を第三者へ提供するに当たっては、法第 23 条第 2 項（オプトアウト）の規定を適用しないこととする。なお、機微（センシティブ）情報のうち要配慮個人情報については、同項において、オプトアウトを用いることができないとされていることに留意する。</p> <p>第 6 条 取得に際しての利用目的の通知等（法第 18 条関係）</p> <p>以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p> <p>1 金融分野における個人情報取扱事業者が行う法第 18 条第 1 項に定める「通知」については、原則として、書面によることとする。また、同項に定める「公表」については、自らの金融商品の販売方法等の事業の態様に応じ、インターネットのホームページ等での公表、事務所の窓口等への書面の掲示・備付け等適切な方法によらなければならない。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p><b>【本人への通知又は公表が必要な事例】</b></p> <p>事例 1) インターネット上で本人が自発的に公にしている個人情報を取得した場合（単に閲覧しただけの場合を除く。）</p> <p>事例 2) インターネット、官報、職員録等から個人情報を取得した場合（単に閲覧しただけの場合を除く。）</p> <p>事例 3) 個人情報の第三者提供を受けた場合</p> <p>（※ 1）「公表」については、2-11（公表）を参照のこと。</p> <p>（※ 2）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p> <p>3-2-4 直接書面等による取得（法第 18 条第 2 項関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、契約書や懸賞応募はがき等の書面等による記載、ユーザー入力画面への打ち込み等の電磁的記録により、直接本人から個人情報を取得する場合には、あらかじめ、本人に対し、その利用目的を明示（※）しなければならない。</p> <p>なお、口頭により個人情報を取得する場合にまで、本項の義務を課するものではないが、その場合は法第 18 条第 1 項に基づいて、あらかじめ利用目的を公表するか、取得後速やかに、その利用目的を、本人に通知するか、又は公表しなければならない。</p> <p>また、人（法人を含む。）の生命、身体又は財産の保護のために緊急に必要な場合は、あらかじめ、本人に対し、その利用目的を明示する必要はないが、その場合は法第 18 条第 1 項に基づいて、取得後速やかにその利用目的を、本人に通知し、又は公表しなければならない（3-2-3（利用目的の通知又は公表）参照）。</p> <p><b>【あらかじめ、本人に対し、その利用目的を明示しなければならない事例】</b></p> <p>事例 1) 本人の個人情報が記載された申込書・契約書等を本人から直接取得する場合</p> <p>事例 2) アンケートに記載された個人情報を直接本人から取得する場合</p>	<p>2 金融分野における個人情報取扱事業者は、与信事業に際して、法第 18 条第 2 項に従い、本人から直接書面に記載された当該本人の個人情報を取得する場合は、利用目的を明示する書面に確認欄を設けること等により、利用目的について本人の同意を得ることが望ましい。</p> <p>なお、与信事業に際して、申込時に利用目的について本人の同意を得る場合、当該申込時に利用目的について同意を得た個人情報については法第 18 条第 1 項に基づく「通知又は公表」を要しないが、それ以降に取得する情報については、あらかじめ利用目的を公表していない限り、利用目的を本人に通知し、又は公表しなければならない。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>事例 3）自社が主催するキャンペーンへの参加希望者が、参加申込みのために自社のホームページの入力画面に入力した個人情報を直接本人から取得する場合</p> <p>【利用目的の明示に該当する事例】</p> <p>事例 1）利用目的を明記した契約書その他の書面を相手方である本人に手渡し、又は送付する場合</p> <p>なお、契約約款又は利用条件等の書面（電磁的記録を含む。）中に利用目的条項を記載する場合は、例えば、裏面約款に利用目的が記載されていることを伝える、又は裏面約款等に記載されている利用目的条項を表面にも記載し、かつ、社会通念上、本人が認識できる場所及び文字の大きさを記載する等、本人が実際に利用目的を確認できるよう留意することが望ましい。</p> <p>事例 2）ネットワーク上において、利用目的を、本人がアクセスした自社のホームページ上に明示し、又は本人の端末装置上に表示する場合</p> <p>なお、ネットワーク上において個人情報を取得する場合は、本人が送信ボタン等をクリックする前等にその利用目的（利用目的の内容が示された画面に 1 回程度の操作でページ遷移するよう設定したリンクやボタンを含む。）が本人の目に留まるようその配置に留意することが望ましい。</p> <p>（※）「本人に対し、その利用目的を明示」とは、本人に対し、その利用目的を明確に示すことをいい、事業の性質及び個人情報の取扱状況に応じ、内容が本人に認識される合理的かつ適切な方法による必要がある。</p> <p>3-2-5 利用目的の通知等をしなくてよい場合（法第 18 条第 4 項関係）</p> <p>次に掲げる場合については、法第 18 条第 1 項から第 3 項までにおいて利用目的の本人への通知（※ 1）、公表（※ 2）又は明示（※ 3）（以下この項において「利用目的の通知等」という。）が求められる場合であっても、当該</p>	<p>3 法第 18 条第 4 項の場合の例としては、通則ガイドライン 3-2-5（利用目的の通知等をしなくてよい場合）に掲げている場合以外に、次に掲げる場合が考えられる。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>利用目的の通知等は不要である。</p> <p>(1) 利用目的を本人に通知し、又は公表することにより本人又は第三者の生命、身体、財産その他の権利利益を害するおそれがある場合（法 18 条第 4 項第 1 号関係）          利用目的を本人に通知し、又は公表することにより本人又は第三者の生命、身体、財産その他の権利利益を害するおそれがある場合は、法第 18 条第 1 項から第 3 項までの適用を受けず、当該利用目的の通知等は不要である。          事例）児童虐待等に対応するために、児童相談所、学校、医療機関等の関係機関において、ネットワークを組んで対応する場合に、加害者である本人に対して当該本人の個人情報の利用目的を通知・公表することにより、虐待を悪化させたり、虐待への対応に支障等が生じたりするおそれがある場合</p> <p>(2) 利用目的を本人に通知し、又は公表することにより事業者の権利又は正当な利益を害するおそれがある場合（法第 18 条第 4 項第 2 号関係）          利用目的を本人に通知し、又は公表することにより事業者の権利又は正当な利益を害するおそれがある場合は、法第 18 条第 1 項から第 3 項までの適用を受けず、当該利用目的の通知等は不要である。          事例）暴力団等の反社会的勢力情報、疑わしい取引の届出の対象情報、業務妨害行為を行う悪質者情報等を、本人又は他の事業者等から取得したことが明らかになることにより、当該情報を取得した企業に害が及ぶ場合</p> <p>(3) 国の機関又は地方公共団体が法令の定める事務を遂行することに対して協力する必要がある場合であって、利用目的を本人に通知し、又は公表することにより当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがあるとき（法第 18</p>	<p>① 利用目的を本人に通知し、又は公表することにより本人又は第三者の生命、身体、財産その他の権利利益を害するおそれがある場合          （例）          ・ 暴力団等の反社会的勢力情報、疑わしい取引の届出の対象情報、振り込め詐欺に利用された口座に関する情報及び業務妨害行為を行う悪質者情報の提供者が逆恨みを買うおそれがある場合</p> <p>② 利用目的を本人に通知し、又は公表することにより金融分野における個人情報取扱事業者の権利又は正当な利益を害するおそれがある場合          （例）          ・ 開発中の新サービス、営業ノウハウが明らかになることにより、企業の健全な競争を害する場合          ・ 振り込め詐欺に利用された口座に関する情報を取得したことが明らかになることにより、情報提供を受けた企業に害が及ぶ場合</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>条第 4 項第 3 号関係）</p> <p>国の機関等（地方公共団体又はその委託を受けた者を含む。）が法令の定める事務を実施する上で、民間企業等の協力を得る必要があり、かつ、本人に対する利用目的の通知等により当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがあると認められる場合は、当該民間企業等は、法第 18 条第 1 項から第 3 項までの適用を受けず、当該利用目的の通知等は不要である。</p> <p>事例）警察が、公開手配を行わないで、被疑者に関する個人情報を、被疑者の立ち回りが予想される個人情報取扱事業者に限って提供した場合において、警察から当該個人情報を受け取った当該個人情報取扱事業者が、利用目的を本人に通知し、又は公表することにより、捜査活動に支障を及ぼすおそれがある場合</p> <p>(4) 取得の状況からみて利用目的が明らかであると認められる場合（法第 18 条第 4 項第 4 号関係）</p> <p>取得の状況からみて利用目的が明らかであると認められる場合は、法第 18 条第 1 項から第 3 項までの適用を受けず、当該利用目的の通知等は不要である。</p> <p>事例 1）商品・サービス等を販売・提供するに当たって住所・電話番号等の個人情報を取得する場合で、その利用目的が当該商品・サービス等の販売・提供のみを確実にを行うためという利用目的であるような場合</p> <p>事例 2）一般の慣行として名刺を交換する場合、書面により、直接本人から、氏名・所属・肩書・連絡先等の個人情報を取得することとなるが、その利用目的が今後の連絡のためという利用目的であるような場合（ただし、ダイレクトメール等の目的に名刺を用いることは自明の利用目的に該当しない場合があるので注意を要する。）</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>(※ 1) 本人への「通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。 (※ 2) 「公表」については、2-11（公表）を参照のこと。 (※ 3) 「明示」については、3-2-4（直接書面等による取得）を参照のこと。</p>	
<p>3-3 個人データの管理（法第 19 条～第 22 条関係） 3-3-1 データ内容の正確性の確保等（法第 19 条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、利用目的の達成に必要な範囲内において、個人情報データベース等への個人情報の入力時の照合・確認の手續の整備、誤り等を発見した場合の訂正等の手續の整備、記録事項の更新、保存期間の設定等を行うことにより、個人データを正確かつ最新の内容に保つよう努めなければならない。</p> <p>なお、保有する個人データを一律に又は常に最新化する必要はなく、それぞれの利用目的に応じて、その必要な範囲内で正確性・最新性を確保すれば足りる。</p> <p>また、個人情報取扱事業者は、保有する個人データについて利用する必要がなくなったとき、すなわち、利用目的が達成され当該目的との関係では当該個人データを保有する合理的な理由が存在しなくなった場合や、利用目的が達成されなかったものの当該目的の前提となる事業自体が中止となった場合等は、当該個人データを遅滞なく消去するよう努めなければならない（※）。なお、法令の定めにより保存期間等が定められている場合は、この限りではない。</p> <p>【個人データについて利用する必要がなくなったときに該当する事例】 事例）キャンペーンの懸賞品送付のため、当該キャンペーンの応募者の個人データを保有していたところ、懸賞品の発送が終わり、不着対応等のための合理的な期間が経過した場合</p> <p>(※)「個人データの消去」とは、当該個人データを個人データとして使えな</p>	<p>第 7 条 データ内容の正確性の確保等（法第 19 条関係） 以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p> <p>金融分野における個人情報取扱事業者は、預金者又は保険契約者等の個人データの保存期間については契約終了後一定期間内とする等、保有する個人データの利用目的に応じ保存期間を定め、当該期間を経過した個人データを消去することとする。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）〈法令条文省略〉</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>くすることであり、当該データを削除することのほか、当該データから特定の個人を識別できないようにすること等を含む。</p>	
<p>3-3-2 安全管理措置（法第 20 条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、その取り扱う個人データの漏えい、滅失又は毀損（以下「漏えい等」という。）の防止その他の個人データの安全管理のため、必要かつ適切な措置を講じなければならないが、当該措置は、個人データが漏えい等をした場合に本人が被る権利利益の侵害の大きさを考慮し、事業の規模及び性質、個人データの取扱状況（取り扱う個人データの性質及び量を含む。）、個人データを記録した媒体の性質等に起因するリスクに応じて、必要かつ適切な内容としなければならない。具体的に講じなければならない措置や当該項目を実践するための手法の例等については、「8（別添）講ずべき安全管理措置の内容」を参照のこと。</p>	<p>第 8 条 安全管理措置（法第 20 条関係）          &lt;「金融分野における個人情報保護に関するガイドラインの安全管理措置等についての実務指針」についても留意する。&gt;</p> <p>1 金融分野における個人情報取扱事業者は、その取り扱う個人データの漏えい、滅失又は毀損の防止その他の個人データの安全管理のため、安全管理に係る基本方針・取扱規程等の整備及び安全管理措置に係る実施体制の整備等の必要かつ適切な措置を講じなければならない。必要かつ適切な措置は、個人データの取得・利用・保管等の各段階に応じた「組織的安全管理措置」、「人的安全管理措置」及び「技術的安全管理措置」を含むものでなければならない。</p> <p>当該措置は、個人データが漏えい、滅失又は毀損等をした場合に本人が被る権利利益の侵害の大きさを考慮し、事業の性質、個人データの取扱状況及び個人データを記録した媒体の性質等に起因するリスクに応じたものとする。</p> <p>例えば、不特定多数者が書店で随時に購入可能な名簿で、事業者において全く加工をしていないものについては、個人の権利利益を侵害するおそれは低いと考えられることから、それを処分するために文書細断機等による処理を行わずに廃棄し、又は廃品回収に出したとしても、事業者の安全管理措置の義務違反にはならない。</p> <p>2 この条における「組織的安全管理措置」とは、個人データの安全管理措置について従業者（法第 21 条参照）の責任と権限を明確に定め、安全管理に関する規程等を整備・運用し、その実施状況の点検・監査を行うこと等の、個人情報取扱事業者の体制整備及び実施措置をいう。</p> <p>3 この条における「人的安全管理措置」とは、従業者との個人データの非開示契約等の締結及び従業者に対する教育・訓練等を実施し、個人データの安</p>



<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
	<p>全管理が図られるよう従業者を監督することをいう。</p> <p>4 この条における「技術的安全管理措置」とは、個人データ及びそれを取り扱う情報システムへのアクセス制御及び情報システムの監視等の、個人データの安全管理に関する技術的な措置をいう。</p> <p>5 金融分野における個人情報取扱事業者は、個人データの安全管理に係る基本方針・取扱規程等の整備として、次に掲げる「組織的安全管理措置」を講じなければならない。</p> <p>（組織的安全管理措置）</p> <p>(1) 規程等の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 個人データの安全管理に係る基本方針の整備</li> <li>② 個人データの安全管理に係る取扱規程の整備</li> <li>③ 個人データの取扱状況の点検及び監査に係る規程の整備</li> <li>④ 外部委託に係る規程の整備</li> </ul> <p>(2) 各管理段階における安全管理に係る取扱規程</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 取得・入力段階における取扱規程</li> <li>② 利用・加工段階における取扱規程</li> <li>③ 保管・保存段階における取扱規程</li> <li>④ 移送・送信段階における取扱規程</li> <li>⑤ 消去・廃棄段階における取扱規程</li> <li>⑥ 漏えい事案等への対応の段階における取扱規程</li> </ul> <p>6 金融分野における個人情報取扱事業者は、個人データの安全管理に係る実施体制の整備として、次に掲げる「組織的安全管理措置」、「人的安全管理措置」及び「技術的安全管理措置」を講じなければならない。</p> <p>（組織的安全管理措置）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 個人データの管理責任者等の設置</li> <li>② 就業規則等における安全管理措置の整備</li> <li>③ 個人データの安全管理に係る取扱規程に従った運用</li> <li>④ 個人データの取扱状況を確認できる手段の整備</li> </ul>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑤ 個人データの取扱状況の点検及び監査体制の整備と実施</li> <li>⑥ 漏えい事案等に対応する体制の整備</li> </ul> <p>（人的安全管理措置）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 従業者との個人データの非開示契約等の締結</li> <li>② 従業者の役割・責任等の明確化</li> <li>③ 従業者への安全管理措置の周知徹底、教育及び訓練</li> <li>④ 従業者による個人データ管理手続の遵守状況の確認</li> </ul> <p>（技術的安全管理措置）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 個人データの利用者の識別及び認証</li> <li>② 個人データの管理区分の設定及びアクセス制御</li> <li>③ 個人データへのアクセス権限の管理</li> <li>④ 個人データの漏えい・毀損等防止策</li> <li>⑤ 個人データへのアクセスの記録及び分析</li> <li>⑥ 個人データを取り扱う情報システムの稼働状況の記録及び分析</li> <li>⑦ 個人データを取り扱う情報システムの監視及び監査</li> </ul>
<p>3-3-3 従業者の監督（法第 21 条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、その従業者に個人データを取り扱わせるに当たって、法第 20 条に基づく安全管理措置を遵守させるよう、当該従業者に対し必要かつ適切な監督をしなければならない。その際、個人データが漏えい等をした場合に本人が被る権利利益の侵害の大きさを考慮し、事業の規模及び性質、個人データの取扱状況（取り扱う個人データの性質及び量を含む。）等に起因するリスクに応じて、個人データを取り扱う従業者に対する教育、研修等の内容及び頻度を充実させるなど、必要かつ適切な措置を講ずることが望ましい。</p> <p>「従業者」とは、個人情報取扱事業者の組織内にあって直接間接に事業者</p>	<p>第 9 条 従業者の監督（法第 21 条関係）</p> <p>＜「金融分野における個人情報保護に関するガイドラインの安全管理措置等についての実務指針」についても留意する。＞</p> <p>1 金融分野における個人情報取扱事業者は、法第 21 条に従い、個人データの安全管理が図られるよう、適切な内部管理体制を構築し、その従業者に対する必要かつ適切な監督を行わなければならない。</p> <p>当該監督は、個人データが漏えい、滅失又は毀損等をした場合に本人が被る権利利益の侵害の大きさを考慮し、事業の性質及び個人データの取扱状況等に起因するリスクに応じたものとする。</p> <p>2 この条における「従業者」とは、個人情報取扱事業者の組織内にあって直</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>の指揮監督を受けて事業者の業務に従事している者等をいい、雇用関係にある従業員（正社員、契約社員、嘱託社員、パート社員、アルバイト社員等）のみならず、取締役、執行役、理事、監査役、監事、派遣社員等も含まれる。</p> <p>【従業員に対して必要かつ適切な監督を行っていない事例】</p> <p>事例 1）従業員が、個人データの安全管理措置を定める規程等に従って業務を行っていることを確認しなかった結果、個人データが漏えいした場合</p> <p>事例 2）内部規程等に違反して個人データが入ったノート型パソコン又は外部記録媒体が繰り返し持ち出されていたにもかかわらず、その行為を放置した結果、当該パソコン又は当該記録媒体が紛失し、個人データが漏えいした場合</p>	<p>接又は間接に事業者の指揮監督を受けて事業者の業務に従事している者等をいい、雇用関係にある従業者（正社員、契約社員、嘱託社員、パート社員、アルバイト社員等）のみならず、事業者との間の雇用関係にない者（取締役、執行役、理事、監査役、監事、派遣社員等）も含まれる。</p> <p>3 金融分野における個人情報取扱事業者は、次に掲げる体制整備等により、従業員に対し必要かつ適切な監督を行わなければならない。</p> <p>① 従業員が、在職中及びその職を退いた後において、その業務に関して知り得た個人データを第三者に知らせ、又は利用目的外に使用しないことを内容とする契約等を採用時等に締結すること。</p> <p>② 個人データの適正な取扱いのための取扱規程の策定を通じた従業員の役割・責任の明確化及び従業員への安全管理義務の周知徹底、教育及び訓練を行うこと。</p> <p>③ 従業員による個人データの持出し等を防ぐため、社内での安全管理措置に定めた事項の遵守状況等の確認及び従業員における個人データの保護に対する点検及び監査制度を整備すること。</p>
<p>3-3-4 委託先の監督（法第 22 条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、個人データの取扱いの全部又は一部を委託（※ 1）する場合は、委託を受けた者（以下「委託先」という。）において当該個人データについて安全管理措置が適切に講じられるよう、委託先に対し必要かつ適切な監督をしなければならない。具体的には、個人情報取扱事業者は、法第 20 条に基づき自らが講ずべき安全管理措置と同等の措置が講じられるよう、監督を行うものとする（※ 2）。</p> <p>その際、委託する業務内容に対して必要のない個人データを提供しないようにすることは当然のこととして、取扱いを委託する個人データの内容を踏</p>	<p>第 10 条 委託先の監督（法第 22 条関係）</p> <p>＜「金融分野における個人情報保護に関するガイドラインの安全管理措置等についての実務指針」についても留意する。＞</p> <p>1 金融分野における個人情報取扱事業者は、個人データの取扱いの全部又は一部を委託する場合は、その取扱いを委託された個人データの安全管理が図られるよう、法第 22 条に従い、委託を受けた者に対する必要かつ適切な監督を行わなければならない。</p> <p>当該監督は、個人データが漏えい、滅失又は毀損等をした場合に本人が被る権利利益の侵害の大きさを考慮し、委託する事業の規模及び性質並びに個</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>まえ、個人データが漏えい等をした場合に本人が被る権利利益の侵害の大きさを考慮し、委託する事業の規模及び性質、個人データの取扱状況（取り扱う個人データの性質及び量を含む。）等に起因するリスクに応じて、次の(1)から(3)までに掲げる必要かつ適切な措置を講じなければならない（※3）。</p> <p>(1) 適切な委託先の選定 委託先の選定に当たっては、委託先の安全管理措置が、少なくとも法第 20 条及び本ガイドラインで委託元に求められるものと同等であることを確認するため、「8（（別添）講ずべき安全管理措置の内容）」に定める各項目が、委託する業務内容に沿って、確実に実施されることについて、あらかじめ確認しなければならない。</p> <p>(2) 委託契約の締結 委託契約には、当該個人データの取扱いに関する、必要かつ適切な安全管理措置として、委託元、委託先双方が同意した内容とともに、委託先における委託された個人データの取扱状況を委託元が合理的に把握することを盛り込むことが望ましい。</p> <p>(3) 委託先における個人データ取扱状況の把握 委託先における委託された個人データの取扱状況を把握するためには、定期的に監査を行う等により、委託契約で盛り込んだ内容の実施の程度を</p>	<p>人データの取扱状況等に起因するリスクに応じたものとする。</p> <p>2 「委託」には、契約の形態や種類を問わず、金融分野における個人情報取扱事業者が他の者に個人データの取扱いの全部又は一部を行わせることを内容とする契約の一切を含む。</p> <p>3 金融分野における個人情報取扱事業者は、個人データを適正に取り扱っていると認められる者を選定し委託するとともに、取扱いを委託した個人データの安全管理措置が図られるよう、個人データの安全管理のための措置を委託先においても確保しなければならない。なお、二段階以上の委託が行われた場合には、委託先の事業者が再委託先等の事業者に対して十分な監督を行っているかについても監督を行わなければならない。</p> <p>具体的には、金融分野における個人情報取扱事業者は、例えば、以下を実施すること。</p> <p>① 個人データの安全管理のため、委託先における組織体制の整備及び安全管理に係る基本方針・取扱規程の策定等の内容を委託先選定の基準に定め、当該基準を定期的に見直さなければならない。</p> <p>なお、委託先の選定に当たっては、必要に応じて個人データを取り扱う場所に赴く又はこれに代わる合理的な方法による確認を行った上で、個人データ管理責任者等が適切に評価することが望ましい。</p> <p>② 委託者の監督・監査・報告徴収に関する権限、委託先における個人データの漏えい・盗用・改ざん及び目的外利用の禁止、再委託に関する条件及び漏えい等が発生した場合の委託先の責任を内容とする安全管理措置を委託契約に盛り込むとともに、定期的に監査を行う等により、定期的又は随時に当該委託契約に定める安全管理措置等の遵守状況を確認し、当該安全管理措置を見直さなければならない。</p> <p>なお、委託契約に定める安全管理措置等の遵守状況については、個人データ管理責任者等が、当該安全管理措置等の見直しを検討することを含め、適切に評価することが望ましい。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）〈法令条文省略〉</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>調査した上で、委託の内容等の見直しを検討することを含め、適切に評価することが望ましい。</p> <p>また、委託先が再委託を行おうとする場合は、委託を行う場合と同様、委託元は、委託先が再委託する相手方、再委託する業務内容、再委託先の個人データの取扱方法等について、委託先から事前報告を受け又は承認を行うこと、及び委託先を通じて又は必要に応じて自らが、定期的に監査を実施すること等により、委託先が再委託先に対して本条の委託先の監督を適切に果たすこと、及び再委託先が法第 20 条に基づく安全管理措置を講ずることを十分に確認することが望ましい（※ 4）。再委託先が再々委託を行う場合以降も、再委託を行う場合と同様である。</p> <p><b>【委託を受けた者に対して必要かつ適切な監督を行っていない事例】</b></p> <p>事例 1) 個人データの安全管理措置の状況を契約締結時及びそれ以後も適宜把握せず外部の事業者に委託した結果、委託先が個人データを漏えいした場合</p> <p>事例 2) 個人データの取扱いに関して必要な安全管理措置の内容を委託先に指示しなかった結果、委託先が個人データを漏えいした場合</p> <p>事例 3) 再委託の条件に関する指示を委託先に行わず、かつ委託先の個人データの取扱状況の確認を怠り、委託先が個人データの処理を再委託した結果、当該再委託先が個人データを漏えいした場合</p> <p>事例 4) 契約の中に、委託元は委託先による再委託の実施状況を把握することが盛り込まれているにもかかわらず、委託先に対して再委託に関する報告を求めるなどの必要な措置を行わず、委託元の認知しない再委託が行われた結果、当該再委託先が個人データを漏えいした場合</p> <p>（※ 1）「個人データの取扱いの委託」とは、契約の形態・種類を問わず、個人情報取扱事業者が他の者に個人データの取扱いを行わせることをいう。具体的には、個人データの入力（本人からの取得を含む）、編</p>	<p>委託先が再委託を行おうとする場合は、委託元は委託を行う場合と同様、再委託の相手方、再委託する業務内容及び再委託先の個人データの取扱方法等について、委託先に事前報告又は承認手続を求める、直接又は委託先を通じて定期的に監査を実施する等により、委託先が再委託先に対して本条の委託先の監督を適切に果たすこと、再委託先が法第 20 条に基づく安全管理措置を講ずることを十分に確認することが望ましい。再委託先が再々委託を行う場合以降も、再委託を行う場合と同様とする。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）〈法令条文省略〉</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>集、分析、出力等の処理を行うことを委託すること等が想定される。</p> <p>（※ 2）委託元が法第 20 条が求める水準を超える高い水準の安全管理措置を講じている場合に、委託先に対してもこれと同等の措置を求める趣旨ではなく、法律上は、委託先は、法第 20 条が求める水準の安全管理措置を講じれば足りると解される。</p> <p>（※ 3）委託先の選定や委託先における個人データ取扱状況の把握に当たっては、取扱いを委託する個人データの内容や規模に応じて適切な方法をとる必要があるが、例えば、必要に応じて個人データを取り扱う場所に赴く又はこれに代わる合理的な方法（口頭による確認を含む。）により確認することが考えられる。</p> <p>（※ 4）委託元が委託先について「必要かつ適切な監督」を行っていない場合で、委託先が再委託をした際に、再委託先が不適切な取扱いを行ったときは、元の委託元による法違反と判断され得るので、再委託をする場合は注意を要する。</p>	
<p>3-4 個人データの第三者への提供（法第 23 条～第 26 条関係）</p> <p>3-4-1 第三者提供の制限の原則（法第 23 条第 1 項関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、個人データの第三者への提供に当たり、あらかじめ本人の同意（※ 1）を得ないで提供してはならない（※ 2）（※ 3）。同意の取得に当たっては、事業の規模及び性質、個人データの取扱状況（取り扱う個人データの性質及び量を含む。）等に応じ、本人が同意に係る判断を行うために必要と考えられる合理的かつ適切な範囲の内容を明確に示さなければならない。</p> <p>なお、あらかじめ、個人情報を第三者に提供することを想定している場合には、利用目的において、その旨を特定しなければならない（3-1-1（利用目的の特定）参照）。</p>	<p>第 11 条 第三者提供の制限（法第 23 条関係）</p> <p>以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p> <p>1 金融分野における個人情報取扱事業者は、法第 23 条に従い、第三者提供についての同意を得る際には、原則として、書面によることとし、当該書面における記載を通じて、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 個人データを提供する第三者</li> <li>② 提供を受けた第三者における利用目的</li> <li>③ 第三者に提供される情報の内容</li> </ol> <p>を本人に認識させた上で同意を得ることとする。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>【第三者提供とされる事例】（ただし、法第 23 条第 5 項各号の場合を除く。） 事例 1）親子兄弟会社、グループ会社の間で個人データを交換する場合 事例 2）フランチャイズ組織の本部と加盟店の間で個人データを交換する場合 事例 3）同業者間で、特定の個人データを交換する場合</p> <p>【第三者提供とされない事例】（ただし、利用目的による制限がある。） 事例）同一事業者内で他部門へ個人データを提供する場合</p> <p>ただし、次の(1)から(4)までに掲げる場合については、第三者への個人データの提供に当たって、本人の同意は不要である。なお、具体的な事例は、3-1-5（利用目的による制限の例外）を参照のこと。</p> <p>(1) 法令に基づいて個人データを提供する場合（法第 23 条第 1 項第 1 号関係）</p> <p>(2) 人（法人を含む。）の生命、身体又は財産といった具体的な権利利益が侵害されるおそれがあり、これを保護するために個人データの提供が必要であり、かつ、本人の同意を得ることが困難である場合（法第 23 条第 1 項第 2 号関係）</p> <p>(3) 公衆衛生の向上又は心身の発展途上にある児童の健全な育成のために特に必要な場合であり、かつ、本人の同意を得ることが困難である場合（法第 23 条第 1 項第 3 号関係）</p> <p>(4) 国の機関等が法令の定める事務を実施する上で、民間企業等の協力を得る必要がある場合であって、協力する民間企業等が当該国の機関等に個人データを提供することについて、本人の同意を得ることが当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがある場合（法第 23 条第 1 項第 4 号関係）</p> <p>（※ 1）「本人の同意」については、2-12（本人の同意）を参照のこと。 （※ 2）ブログやその他の SNS に書き込まれた個人データを含む情報につい</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>ては、当該情報を書き込んだ者の明確な意思で不特定多数又は限定された対象に対して公開されている情報であり、その内容を誰が閲覧できるかについて当該情報を書き込んだ者が指定していることから、その公開範囲について、インターネット回線への接続サービスを提供するプロバイダやブログその他の SNS の運営事業者等に裁量の余地はないため、このような場合は、当該事業者が個人データを第三者に提供しているとは解されない。</p> <p>（※ 3）個人情報取扱事業者若しくはその従業者又はこれらであった者が、その業務に関して取り扱った個人情報データベース等（その全部又は一部を複製し、又は加工したものを含む。）を自己若しくは第三者の不正な利益を図る目的で提供し、又は盗用したときは、法第 83 条により刑事罰（1 年以下の懲役又は 50 万円以下の罰金）が科され得る。</p>	<p>2 個人信用情報機関に対する提供</p> <p>個人信用情報機関に対して個人データが提供される場合には、個人信用情報機関を通じて当該機関の会員企業にも情報が提供されることとなるため、個人信用情報機関に個人データを提供する金融分野における個人情報取扱事業者が本人の同意を得ることとする。</p> <p>本人から同意を得るに当たっては、本人が、個人データが個人信用情報機関を通じて当該機関の会員企業にも提供されることを明確に認識した上で、同意に関する判断を行うことができるようにすることとする。このため、事業者は、同意を得る書面に、前項に定める事項のほか、個人データが当該機関の会員企業にも提供される旨の記載及び当該機関の会員企業として個人データを利用する者の表示を行うこととする。</p> <p>「当該機関の会員企業として個人データを利用する者」の表示は、「当該機関の会員企業として個人データを利用する者」の外延を本人に客観的かつ明確に示すものであることが必要であり、会員企業の名称を記載する方法若しくは当該機関の規約等及び会員企業名を常時公表しているインターネット</p>



<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>3-4-2 オプトアウトによる第三者提供（法第 23 条第 2 項～第 4 項関係）</p> <p>3-4-2-1 オプトアウトに関する原則（法第 23 条第 2 項関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、個人データの第三者への提供に当たり、次の(1)から(5)までに掲げる事項をあらかじめ（※ 1）本人に通知し、又は本人が容易に知り得る状態（※ 2）に置くとともに、個人情報保護委員会に届け出た場合には（※ 3）、法第 23 条第 1 項の規定にかかわらず、あらかじめ本人の同意（※ 4）を得ることなく、個人データを第三者に提供することができる（※ 5）（オプトアウトによる第三者提供）。</p> <p>また、個人情報取扱事業者は、法第 23 条第 2 項に基づき、必要な事項を個人情報保護委員会に届け出たときは、その内容を自らもインターネットの利用その他の適切な方法により公表（※ 6）するものとする。</p> <p>なお、要配慮個人情報は、オプトアウトにより第三者に提供することはできず、第三者に提供するに当たっては、法第 23 条第 1 項各号又は同条第 5 項各号に該当する場合以外は、必ずあらかじめ本人の同意を得る必要があるので、注意を要する。</p> <p>(1) 第三者への提供を利用目的とすること。</p>	<p>のホームページ（苦情処理の窓口の連絡先等、第 18 条の内容を記載したものの）のアドレスを記載する方法等により、本人が同意の可否を判断するに足りる具体性をもって示すことをいう。また、本人に表示する個人信用情報機関の規約等においては、機関の加入資格及び会員企業の外延が明確に示されるとともに、個人データの適正管理、情報の目的外利用の防止等の観点から、安全管理体制の整備、守秘義務の遵守及び違反に対する制裁措置等を明確に記載することが適切である。</p> <p>なお、金融分野における個人情報取扱事業者は、個人信用情報機関から得た資金需要者の返済能力に関する情報については、当該資金需要者の返済能力の調査以外の目的に使用することのないよう、慎重に取り扱うこととする。</p> <p>3 与信事業における法第 23 条第 2 項（オプトアウト）の規定の適用</p> <p>金融分野における個人情報取扱事業者は、与信事業に係る個人の返済能力に関する情報を個人信用情報機関へ提供するに当たっては、法第 23 条第 2 項の規定を適用しないこととし、前項に従い本人の同意を得ることとする。</p>

個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞	金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）
<p>(2) 第三者に提供される個人データの項目            事例 1) 氏名、住所、電話番号、年齢            事例 2) 氏名、商品購入履歴</p> <p>(3) 第三者への提供の方法            事例 1) 書籍（電子書籍を含む。）として出版            事例 2) インターネットに掲載            事例 3) プリントアウトして交付            事例 4) 各種通信手段による配信            事例 5) その他外部記録媒体の形式での交付</p> <p>(4) 本人の求めに応じて第三者への提供を停止すること。</p> <p>(5) 本人の求めを受け付ける方法（※ 7）            事例 1) 郵送            事例 2) メール送信            事例 3) ホームページ上の指定フォームへの入力            事例 4) 事業所の窓口での受付            事例 5) 電話</p> <p><b>【オプトアウトによる第三者提供の事例】</b>            事例) 住宅地図業者（表札や郵便受けを調べて住宅地図を作成・販売）やデータベース事業者（ダイレクトメール用の名簿等を作成・販売）が、あらかじめ上記(1)から(5)までに掲げる事項を自社のホームページに常時掲載し、本人からの停止の求めを受け付けられる状態にし、個人情報保護委員会に必要な届出を行った上で、販売等を行う場合</p> <p>（※ 1）オプトアウトによる第三者提供を行う際は、上記の(1)から(5)までに掲げる事項をあらかじめ、第三者に提供される個人データによって識別される本人が当該提供の停止を求めるのに必要な期間をおかなければならない（規則第 7 条第 1 項第 1 号）ため、本人に通知し又は本</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>人が容易に知り得る状態に置いた時点から、極めて短期間の後に、第三者提供を行ったような場合は、「本人が当該提供の停止を求めるのに必要な期間」をおいていないと判断され得る。</p> <p>具体的な期間については、業種、ビジネスの態様、通知又は容易に知り得る状態の態様、本人と個人情報取扱事業者との近接性、本人から停止の求めを受け付ける体制、提供される個人データの性質などによっても異なり得るため、個別具体的に判断する必要がある。</p> <p>また、「本人に通知し、又は本人が容易に知り得る状態に置く」時期と、「個人情報保護委員会に届け出」る時期は、必ずしも同時である必要はないが、本人に通知し、又は本人が容易に知り得る状態に置いた後、速やかに個人情報保護委員会に届け出ることが望ましい。</p> <p>（※2）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p> <p>「本人が容易に知り得る状態」とは、事業所の窓口等への書面の掲示・備付けやホームページへの掲載その他の継続的方法により、本人が知ろうとすれば、時間的にも、その手段においても、簡単に知ることができる状態をいい、事業の性質及び個人情報の取扱状況に応じ、本人が確実に認識できる適切かつ合理的な方法によらなければならない（規則第 7 条第 1 項第 2 号）。</p> <p><b>【本人が容易に知り得る状態に該当する事例】</b></p> <p>事例 1）本人が閲覧することが合理的に予測される個人情報取扱事業者のホームページにおいて、本人が分かりやすい場所（例：ホームページのトップページから 1 回程度の操作で到達できる場所等）に法に定められた事項を分かりやすく継続的に掲載する場合</p> <p>事例 2）本人が来訪することが合理的に予測される事務所の窓口等への掲示、備付け等が継続的に行われている場合</p> <p>事例 3）本人に頒布されている定期刊行物への定期的掲載を行っている場合</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>事例 4）電子商取引において、商品を紹介するホームページにリンク先を継続的に表示する場合</p> <p>（※ 3）届出の方法は、個人情報保護委員会が定める方法によって行わなければならない（規則第 7 条第 2 項）。なお、代理人によって届出を行う場合は、個人情報保護委員会が定める様式によるその権限を称する書面を提出しなければならない（規則第 7 条第 3 項）。また、外国にある個人情報取扱事業者が、届出を行う場合には、国内に住所を有する者に、当該届出に関する一切の行為につき当該個人情報取扱事業者を代理する権限を有するものを定めなければならない、当該代理権を証する書面を個人情報保護委員会に提出しなければならない。</p> <p>（※ 4）「本人の同意」については、2-12（本人の同意）を参照のこと。</p> <p>（※ 5）法第 15 条第 1 項の規定により特定された当初の利用目的に、個人情報の第三者提供に関する事項が含まれていない場合は、第三者提供を行うと目的外利用となるため、オプトアウトによる第三者提供を行うことはできない。</p> <p>（※ 6）基本的には「インターネットの方法」による「公表」が望ましいが、個人情報取扱事業者の特性、本人との近接性などにより、当該方法以外の適切な方法による公表も可能である。「公表」については 2-11（公表）を参照のこと。</p> <p>（※ 7）「本人の求めを受け付ける方法」には、本人が求めを行う連絡先（事業者名、窓口名、郵送先住所又は送信先メールアドレス等。当該個人情報取扱事業者が外国に本拠地を置く場合においては国内代理人の氏名、連絡先等。）が含まれる。</p> <p>3-4-2-2 オプトアウトに関する事項の変更（法第 23 条第 3 項関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、法第 23 条第 2 項に基づきオプトアウトにより個人データの第三者提供を行っている場合であって、提供される個人データの項目、提供の方法又は第三者への提供を停止すべきとの本人の求めを受け付</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>ける方法を変更する場合は、変更する内容について、変更にあらかじめ（※1）、本人に通知し、又は本人が容易に知り得る状態（※2）に置くとともに、個人情報保護委員会に届け出なければならない（※3）。</p> <p>なお、個人情報取扱事業者は、法第 23 条第 3 項に基づき、必要な事項を個人情報保護委員会に届け出たときは、その内容を自らも公表（※4）するものとする。</p> <p>（※1）「あらかじめ」の具体的な期間については、3-4-2-1（オプトアウトに関する原則）を参照のこと。</p> <p>（※2）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。 「本人が容易に知り得る状態」については、3-4-2-1（オプトアウトに関する原則）を参照のこと。なお、次のような方法であれば、適切かつ合理的な方法と解される。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 変更する内容を、例えば新旧対照表等により、分かりやすく明示した書面により本人に通知すること。</li> <li>・ 本人が閲覧することが合理的に予測される個人情報取扱事業者のホームページにおいて、本人が分かりやすい場所に変更する内容を、例えば新旧対照表等により、分かりやすく明示すること。</li> </ul> <p>（※3）届出の方法等については、3-4-2-1（オプトアウトに関する原則）を参照のこと。</p> <p>（※4）「公表」については、2-11（公表）を参照のこと。</p> <p>3-4-3 第三者に該当しない場合（法第 23 条第 5 項・第 6 項関係）</p> <p>次の(1)から(3)までの場合については、個人データの提供先は個人情報取扱事業者とは別の主体として形式的には第三者に該当するものの、本人との関係において提供主体である個人情報取扱事業者と一体のものとして取り扱うことに合理性があるため、第三者に該当しないものとする。</p> <p>このような要件を満たす場合には、個人情報取扱事業者は、法第 23 条第 1</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>項から第 3 項までの規定にかかわらず、あらかじめの本人の同意又は第三者提供におけるオプトアウトを行うことなく、個人データを提供することができる。</p> <p>(1) 委託（法第 23 条第 5 項第 1 号関係）            利用目的の達成に必要な範囲内において、個人データの取扱いに関する業務の全部又は一部を委託することに伴い、当該個人データが提供される場合は、当該提供先は第三者に該当しない。            なお、個人情報取扱事業者には、法第 22 条により、委託先に対する監督責任が課される（3-3-4（委託先の監督）参照）。            事例 1）データの打ち込み等、情報処理を委託するために個人データを提供する場合            事例 2）百貨店が注文を受けた商品の配送のために、宅配業者に個人データを提供する場合</p> <p>(2) 事業の承継（法第 23 条第 5 項第 2 号関係）            合併、分社化、事業譲渡等により事業が承継されることに伴い、当該事業に係る個人データが提供される場合は、当該提供先は第三者に該当しない。            なお、事業の承継後も、個人データが当該事業の承継により提供される前の利用目的の範囲内で利用しなければならない（3-1-4（事業の承継）参照）。            また、事業の承継のための契約を締結するより前の交渉段階で、相手会社から自社の調査を受け、自社の個人データを相手会社へ提供する場合も、本号に該当し、あらかじめ本人の同意を得ることなく又は第三者提供におけるオプトアウト手続を行うことなく、個人データを提供することができるが、当該データの利用目的及び取扱方法、漏えい等が発生した場合の措置、事業承継の交渉が不調となった場合の措置等、相手会社に安全管</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>理措置を遵守させるために必要な契約を締結しなければならない。</p> <p>事例 1) 合併、分社化により、新会社に個人データを提供する場合 事例 2) 事業譲渡により、譲渡先企業に個人データを提供する場合</p> <p>(3) 共同利用（法第 23 条第 5 項第 3 号関係） 特定の者との間で共同して利用される個人データを当該特定の者に提供する場合（※ 1）であって、次の①から⑤までの情報（※ 2）を、提供に当たりあらかじめ本人に通知（※ 3）し、又は本人が容易に知り得る状態（※ 4）に置いているときには、当該提供先は、本人から見て、当該個人データを当初提供した事業者と一体のものとして取り扱われることに合理性があると考えられることから、第三者に該当しない（※ 5）。</p> <p>また、既に特定の事業者が取得している個人データを他の事業者と共同して利用する場合には、既に取得している事業者が法第 15 条第 1 項の規定により特定した利用目的の範囲で共同して利用しなければならない。</p> <p>① 共同利用をする旨 ② 共同して利用される個人データの項目 事例 1) 氏名、住所、電話番号、年齢 事例 2) 氏名、商品購入履歴 ③ 共同して利用する者の範囲 「共同利用の趣旨」は、本人から見て、当該個人データを提供する事業者と一体のものとして取り扱われることに合理性がある範囲で、当該個人データを共同して利用することである。</p> <p>したがって、共同利用者の範囲については、本人がどの事業者まで将来利用されるか判断できる程度に明確にする必要がある。</p> <p>なお、当該範囲が明確である限りにおいては、必ずしも事業者の名称等を個別に全て列挙する必要はないが、本人がどの事業者まで利用されるか判断できるようにしなければならない。</p> <p>④ 利用する者の利用目的</p>	<p>4 法第 23 条第 5 項第 3 号に定める通知等（共同利用の際の通知等） 金融分野における個人情報取扱事業者は、法第 23 条第 5 項第 3 号に定める「通知」については、原則として、書面によることとする。</p> <p>金融分野における個人情報取扱事業者による「共同して利用する者の範囲」の通知等については、共同して利用する者を個別に列挙することが望ましい。また、共同して利用する者の外延を示すことにより本人に通知等する場合には、本人が容易に理解できるよう共同して利用する者を具体的に特定しなければならない。外延を示す具体例としては、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 当社及び有価証券報告書等に記載されている、当社の子会社</li> <li>・ 当社及び有価証券報告書等に記載されている、当社の連結対象会社及び持分法適用会社</li> </ul> <p>といった方法が適切である。</p> <p>なお、同号は、同号に定める「個人データの管理について責任を有する者」以外の共同して利用する者における安全管理責任等を免除する趣旨ではないことに留意する。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>共同して利用する個人データについて、その利用目的を全て、本人に通知し、又は本人が容易に知り得る状態に置いていなければならない。</p> <p>なお、利用目的が個人データの項目によって異なる場合には、当該個人データの項目ごとに利用目的を区別して記載することが望ましい。</p> <p>⑤ 当該個人データの管理について責任を有する者の氏名又は名称</p> <p>「個人データの管理について責任を有する者」とは、開示等の請求及び苦情を受け付け、その処理に尽力するとともに、個人データの内容等について、開示、訂正、利用停止等の権限を有し、安全管理等個人データの管理について責任を有する者をいう。</p> <p>なお、ここでいう「責任を有する者」とは、共同して利用する全ての事業者の中で、第一次的に苦情の受付・処理、開示・訂正等を行う権限を有する者をいい、共同利用者のうち一事業者の内部の担当責任者をいうものではない。</p> <p>また、個人データの管理について責任を有する者は、利用目的の達成に必要な範囲内において、共同利用者間で利用している個人データを正確かつ最新の内容に保つよう努めなければならない（3-3-1（データ内容の正確性の確保等）参照）。</p> <p><b>【共同利用に該当する事例】</b></p> <p>事例 1）グループ企業で総合的なサービスを提供するために取得時の利用目的（法第 15 条第 2 項の規定に従い変更された利用目的を含む。以下同じ。）の範囲内で情報を共同利用する場合</p> <p>事例 2）親子兄弟会社の間で取得時の利用目的の範囲内で個人データを共同利用する場合</p> <p>事例 3）使用者と労働組合又は労働者の過半数を代表する者との間で取得時の利用目的の範囲内で従業員の個人データを共同利用する場合</p> <p>（※ 1）共同利用の対象となる個人データの提供については、必ずしも全て</p>	



<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>の共同利用者が双方向で行う必要はなく、一部の共同利用者に対し、一方向で行うこともできる。</p> <p>（※ 2）事業者が共同利用を実施する場合には、共同利用者における責任等を明確にし円滑に実施する観点から、上記①から⑤までの情報のほか、例えば、次の（ア）から（カ）までの事項についても、あらかじめ取り決めておくことが望ましい。</p> <p>（ア）共同利用者の要件（グループ会社であること、特定のキャンペーン事業の一員であること等、共同利用による事業遂行上の一定の枠組み）</p> <p>（イ）各共同利用者の個人情報取扱責任者、問合せ担当者及び連絡先</p> <p>（ウ）共同利用する個人データの取扱いに関する事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人データの漏えい等防止に関する事項</li> <li>・目的外の加工、利用、複写、複製等の禁止</li> <li>・共同利用終了後のデータの返還、消去、廃棄に関する事項</li> </ul> <p>（エ）共同利用する個人データの取扱いに関する取決めが遵守されなかった場合の措置</p> <p>（オ）共同利用する個人データに関する事件・事故が発生した場合の報告・連絡に関する事項</p> <p>（カ）共同利用を終了する際の手続</p> <p>（※ 3）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p> <p>（※ 4）「本人が容易に知り得る状態」については、3-4-2（オプトアウトによる第三者提供）を参照のこと。</p> <p>（※ 5）共同利用か委託かは、個人データの取扱いの形態によって判断されるものであって、共同利用者の範囲に委託先事業者が含まれる場合であっても、委託先との関係は、共同利用となるわけではなく、委託元は委託先の監督義務を免れるわけではない。</p> <p>＜共同利用に係る事項の変更（法第 23 条第 6 項関係）＞</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>個人情報取扱事業者は、個人データを共同利用する場合において、「共同利用する者の利用目的」については、社会通念上、本人が通常予期し得る限度と客観的に認められる範囲内（※ 1）で変更することができ、「個人データの管理について責任を有する者の氏名又は名称」についても変更することができるが、いずれも変更する前に、本人に通知（※ 2）し、又は本人が容易に知り得る状態（※ 3）に置かなければならない。</p> <p>なお、「共同して利用される個人データの項目」及び「共同して利用する者の範囲」について変更することは、原則として認められないが、例えば次のような場合は、引き続き共同利用を行うことができる。</p> <p>事例 1）共同利用を行う個人データの項目や事業者の変更につき、あらかじめ本人の同意を得た場合</p> <p>事例 2）共同利用を行う事業者の名称に変更があるが、共同して利用される個人データの項目には変更がない場合</p> <p>事例 3）共同利用を行う事業者について事業の承継（※ 4）が行われた場合（共同利用する個人データの項目等の変更がないことが前提）</p> <p>（※ 1）「本人が通常予期し得る限度と客観的に認められる範囲」については、3-1-2（利用目的の変更）を参照のこと。</p> <p>（※ 2）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p> <p>（※ 3）「本人が容易に知り得る状態」については、3-4-2（オプトアウトによる第三者提供）を参照のこと。</p> <p>（※ 4）「事業の承継」については、3-1-4（事業の承継）を参照のこと。</p> <p>3-4-4 外国にある第三者への提供の制限（法第 24 条関係）</p> <p>外国にある第三者への提供の制限については、別途定める「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（外国にある第三者への提供編）」を参照のこと。</p>	<p>＜法第 24 条関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>3-4-5 第三者提供に係る記録の作成等（法第 25 条関係）            第三者提供に係る記録の作成等については、別途定める「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（第三者提供時の確認・記録義務編）」を参照のこと。</p> <p>3-4-6 第三者提供を受ける際の確認等（法第 26 条関係）            第三者提供を受ける際の確認等については、別途定める「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（第三者提供時の確認・記録義務編）」を参照のこと。</p>	<p>＜法第 25 条関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p> <p>＜法第 26 条関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>
<p>3-5 保有個人データに関する事項の公表等、保有個人データの開示・訂正等・利用停止等（法第 27 条～第 34 条関係）</p> <p>3-5-1 保有個人データに関する事項の公表等（法第 27 条関係）</p> <p>(1) 保有個人データに関する事項の本人への周知（法第 27 条第 1 項関係）            個人情報取扱事業者は、保有個人データについて、次の①から④までの情報を本人の知り得る状態（本人の求めに応じて遅滞なく回答する場合を含む。）（※ 1）に置かなければならない。</p> <p>① 個人情報取扱事業者の氏名又は名称</p> <p>② 全ての保有個人データの利用目的（※ 2）（ただし、一定の場合（※ 3）を除く。）</p> <p>③ 保有個人データの利用目的の通知の求め又は開示等の請求（※ 4）に応じる手続及び保有個人データの利用目的の通知の求め又は開示の請求に係る手数料の額（定めた場合に限る。）（※ 5）</p> <p>④ 保有個人データの取扱いに関する苦情の申出先            （例）苦情を受け付ける担当窓口名・係名、郵送用住所、受付電話番号            その他の苦情申出先（個人情報取扱事業者が認定個人情報保護団体</p>	<p>第 12 条 保有個人データに関する事項の公表等（法第 27 条関係）            以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>の対象事業者である場合は、その団体の名称及び苦情解決の申出先を含む。）</p> <p>（※ 1）「本人の知り得る状態（本人の求めに応じて遅滞なく回答する場合を含む。）」とは、ホームページへの掲載、パンフレットの配布、本人の求めに応じて遅滞なく回答を行うこと等、本人が知ろうとすれば、知ることができる状態に置くことをいい、常にその時点での正確な内容を本人の知り得る状態に置かなければならない。必ずしもホームページへの掲載、又は事務所等の窓口等へ掲示すること等が継続的に行われることまでを必要とするものではないが、事業の性質及び個人情報の取扱状況に応じ、内容が本人に認識される合理的かつ適切な方法によらなければならない。</p> <p>なお、普段から問合せ対応が多い事業者等において、ホームページへ継続的に掲載する方法は、「本人が容易に知り得る状態」（3-4-2（オプトアウトによる第三者提供）参照）及び「本人の知り得る状態（本人の求めに応じて遅滞なく回答する場合を含む。）」の両者の趣旨に合致する方法である。</p> <p>【本人の知り得る状態に該当する事例】</p> <p>事例 1）問合せ窓口を設け、問合せがあれば、口頭又は文書で回答できるよう体制を構築しておく場合</p> <p>事例 2）店舗にパンフレットを備え置く場合</p> <p>事例 3）電子商取引において、商品を紹介するホームページに問合せ先のメールアドレスを表示する場合</p> <p>（※ 2）利用目的に第三者提供が含まれる場合は、その旨も明らかにしなければならない。</p> <p>（※ 3）「一定の場合」とは、法第 18 条第 4 項第 1 号から第 3 号までに掲げる次の場合をいう（3-2-5（利用目的の通知等をしなくてよい場合）参照）。</p>	<p>金融分野における個人情報取扱事業者が、法第 27 条に従い、保有個人データに関する事項を本人の知り得る状態に置く際には、自らの金融商品の販売方法等の事業の態様に応じて適切な方法による必要があり、継続的に公表を行う方法として、例えば、第 18 条に定める「個人情報保護宣言」と一体としてインターネットのホームページでの常時掲載を行うこと、又は事務所の窓口等での常時掲示・備付けを行うこと等が考えられる。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>ア) 利用目的を本人に通知し、又は公表することにより本人又は第三者の生命、身体、財産その他の権利利益を害するおそれがある場合 イ) 利用目的を本人に通知し、又は公表することにより当該個人情報取扱事業者の権利又は利益が侵害されるおそれがある場合 ウ) 国の機関等が法令の定める事務を実施する上で、民間企業等の協力を得る必要がある場合であり、協力する民間企業等が国の機関等から受け取った個人情報の利用目的を本人に通知し、又は公表することにより、当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがある場合</p> <p>(※ 4) 「開示等の請求」とは、保有個人データの開示（3-5-2（保有個人データの開示）参照）、保有個人データの内容の訂正、追加若しくは削除（3-5-3（保有個人データの訂正等）参照）、保有個人データの利用の停止若しくは消去又は保有個人データの第三者への提供の停止（3-5-4（保有個人データの利用停止等）参照）の請求をいう。</p> <p>(※ 5) 手数料の額を定める場合は、実費を勘案して合理的であると認められる範囲内において、定めなければならない（3-5-7（手数料）参照）。</p> <p>(2) 保有個人データの利用目的の通知（法第 27 条第 2 項、第 3 項関係） 個人情報取扱事業者は、次の①から④までの場合を除いて、本人から、当該本人が識別される保有個人データの利用目的の通知を求められたときは、遅滞なく、本人に通知（※）しなければならない。 なお、通知しない旨を決定したときは、遅滞なく、その旨を本人に通知しなければならない。</p> <p>① 上記(1)（法第 27 条第 1 項）の措置により、本人が識別される保有個人データの利用目的が明らかである場合 ② 利用目的を本人に通知し、又は公表することにより本人又は第三者の生命、身体、財産その他の権利利益を害するおそれがある場合（法第 18 条第 4 項第 1 号）（3-2-5（利用目的の通知等をしなくてよい場合）参照） ③ 利用目的を本人に通知し、又は公表することにより当該個人情報取扱</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>事業者の権利又は利益が侵害されるおそれがある場合（法第 18 条第 4 項第 2 号）（3-2-5（利用目的の通知等をしなくてよい場合）参照）</p> <p>④ 国の機関等が法令の定める事務を実施する上で、民間企業等の協力を得る必要がある場合であり、協力する民間企業等が国の機関等から受け取った保有個人データの利用目的を本人に通知し、又は公表することにより、本人の同意を得ることが当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがある場合（法第 18 条第 4 項第 3 号）（3-2-5（利用目的の通知等をしなくてよい場合）参照）</p> <p>（※）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p>	
<p>3-5-2 保有個人データの開示（法第 28 条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、本人から、当該本人が識別される保有個人データの開示（存在しないときにはその旨を知らせることを含む。）の請求を受けたときは、本人に対し、書面の交付による方法（開示の請求を行った者が同意した方法があるときはその方法（※1））により、遅滞なく、当該保有個人データを開示しなければならない（※2）。</p> <p>ただし、開示することにより次の(1)から(3)までのいずれかに該当する場合は、その全部又は一部を開示しないことができるが、これにより開示しない旨の決定をしたとき又は請求に係る保有個人データが存在しないときは、遅滞なく、その旨を本人に通知（※3）しなければならない。</p> <p>(1) 本人又は第三者の生命、身体、財産その他の権利利益を害するおそれがある場合</p> <p>保有個人データを本人に開示することにより、本人又は第三者の生命、身体、財産その他の権利利益を害するおそれがある場合は、当該保有個人データの全部又は一部を開示しないことができる。</p>	<p>第 13 条 開示（法第 28 条関係）</p> <p>以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>事例) 医療機関等において、病名等を患者に開示することにより、患者本人の心身状況を悪化させるおそれがある場合</p> <p>(2) 個人情報取扱事業者の業務の適正な実施に著しい支障を及ぼすおそれがある場合 保有個人データを本人に開示することにより、個人情報取扱事業者の業務の適正な実施に著しい支障を及ぼすおそれがある場合は、当該保有個人データの全部又は一部を開示しないことができる。 事例 1) 試験実施機関において、採点情報の全てを開示することにより、試験制度の維持に著しい支障を及ぼすおそれがある場合 事例 2) 同一の本人から複雑な対応を要する同一内容について繰り返し開示の請求があり、事実上問合せ窓口が占有されることによって他の問合せ対応業務が立ち行かなくなる等、業務上著しい支障を及ぼすおそれがある場合</p> <p>(3) 他の法令に違反することとなる場合 保有個人データを本人に開示することにより、他の法令に違反することとなる場合は、当該保有個人データの全部又は一部を開示しないことができる。 事例) 刑法（明治 40 年法律第 45 号）第 134 条（秘密漏示罪）や電気通信事業法（昭和 59 年法律第 86 号）第 4 条（通信の秘密の保護）に違反することとなる場合</p> <p>また、他の法令の規定により、法第 28 条第 2 項及び政令第 9 条に定める方法に相当する方法（書面の交付による方法（開示の請求を行った者が同意した方法があるときは、当該方法））により当該本人が識別される保有個人データを開示することとされている場合には、法第 28 条第 1 項及び第 2 項の規定は適用されず、当該他の法令の規定が適用されることとなる。</p>	<p>法第 28 条第 2 項第 2 号の場合の例としては、通則ガイドライン 3-5-2（保有個人データの開示）に掲げている場合以外に、次に掲げる場合が考えられる。 （例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 与信審査内容等の個人情報取扱事業者が付加した情報の開示請求を受けた場合</li> <li>・ 保有個人データを開示することにより評価・試験等の適正な実施が妨げられる場合</li> <li>・ 企業秘密が明らかになるおそれがある場合</li> </ul> <p>なお、開示すべき保有個人データの量が多いことのみでは法第 28 条第 2 項第 2 号の場合に該当しない。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>事例）タクシー業務適正化特別措置法（昭和 45 年法律第 75 号）第 19 条に規定する登録実施機関が、同法第 12 条及び第 19 条の規定に基づき、登録運転者に係る原簿の謄本の交付又は閲覧に係る請求に対応する場合</p> <p>なお、本人が、裁判上の訴えにより、当該本人が識別される保有個人データの開示を請求する場合と本条との関係については、3-5-8（裁判上の訴えの事前請求）を参照のこと。</p> <p>（※ 1）「開示の請求を行った者が同意した方法があるときはその方法」について、開示の方法としては、請求を行った者が同意している場合には電子メール、電話等様々な方法が可能であり、書面の交付による方法は同意がなくても可能という意味である。</p> <p>また、開示の請求を行った者から開示の方法について特に指定がなく、個人情報取扱事業者が提示した方法に対して異議を述べなかった場合（電話での開示の請求があり、必要な本人確認等の後、そのまま電話で問合せに回答する場合を含む。）は、当該方法について同意があったものとして取り扱うことができる。開示の請求があった者からの同意の取り方として、個人情報取扱事業者が開示方法を提示して、その者が希望する複数の方法の中から当該事業者が選択することも考えられる。</p> <p>（※ 2）消費者等、本人の権利利益保護の観点からは、事業活動の特性、規模及び実態を考慮して、個人情報の取得元又は取得方法（取得源の種類等）を、可能な限り具体的に明記し、本人からの求めに一層対応していくことが望ましい。</p> <p>（※ 3）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p>	
<p>3-5-3 保有個人データの訂正等（法第 29 条関係）</p>	<p>＜法第 29 条関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>



<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>個人情報取扱事業者は、本人から、当該本人が識別される保有個人データに誤りがあり、事実でないという理由によって、内容の訂正、追加又は削除（※1）（以下「訂正等」という。）の請求を受けた場合は、利用目的の達成に必要な範囲で遅滞なく必要な調査を行い、その結果に基づき、原則として（※2）、訂正等を行わなければならない。</p> <p>なお、個人情報取扱事業者は、法第 29 条第 2 項の規定に基づき請求に係る保有個人データの内容の全部若しくは一部について訂正等を行ったとき、又は訂正等を行わない旨の決定をしたときは、遅滞なく、その旨（訂正等を行ったときは、その内容を含む。）を本人に通知（※3）しなければならない。</p> <p>また、保有個人データの内容の訂正等に関して他の法令の規定により特別の手續が定められている場合には、法第 29 条第 1 項及び第 2 項の規定は適用されず、当該他の法令の規定が適用されることとなる。</p> <p>なお、本人が、裁判上の訴えにより、当該本人が識別される保有個人データの訂正等を請求する場合と本条との関係については、3-5-8（裁判上の訴えの事前請求）を参照のこと。</p> <p>（※1）「削除」とは、不要な情報を除くことをいう。</p> <p>（※2）利用目的からみて訂正等が必要ではない場合、保有個人データが誤りである旨の指摘が正しくない場合には、訂正等を行う必要はない。 ただし、その場合には、遅滞なく、訂正等を行わない旨を本人に通知しなければならない。</p> <p>（※3）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p> <p>3-5-4 保有個人データの利用停止等（法第 30 条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、本人から、当該本人が識別される保有個人データが、法第 16 条の規定に違反して本人の同意なく目的外利用がされている、又は法第 17 条の規定に違反して偽りその他不正の手段により個人情報が取得され若しくは本人の同意なく要配慮個人情報が取得されたものであるとい</p>	<p>＜法第 30 条関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>う理由によって、当該保有個人データの利用の停止又は消去（※ 1）（以下「利用停止等」という。）の請求を受けた場合であって、その請求に理由があることが判明したときは、原則として（※ 2）、遅滞なく、利用停止等を行わなければならない。</p> <p>また、個人情報取扱事業者は、本人から、当該本人が識別される保有個人データが、法第 23 条第 1 項又は第 24 条の規定に違反して本人の同意なく第三者に提供されているという理由によって、当該保有個人データの第三者提供の停止の請求を受けた場合であって、その請求に理由があることが判明したときは、原則として（※ 3）、遅滞なく、第三者提供を停止しなければならない。</p> <p>なお、個人情報取扱事業者は、上記により、利用停止等を行ったとき若しくは利用停止等を行わない旨の決定をしたとき、又は、第三者提供の停止を行ったとき若しくは第三者提供を停止しない旨の決定をしたときは、遅滞なく、その旨を本人に通知（※ 4）しなければならない。</p> <p>また、本人が、裁判上の訴えにより、当該本人が識別される保有個人データの利用停止等又は第三者提供の停止を請求する場合と本条との関係については、3-5-8（裁判上の訴えの事前請求）を参照のこと。</p> <p>なお、消費者等、本人の権利利益保護の観点からは、事業活動の特性、規模及び実態を考慮して、保有個人データについて本人から求めがあった場合には、ダイレクトメールの発送停止等、自主的に利用停止に応じる等、本人からの求めにより一層対応していくことが望ましい。</p> <p>（※ 1）「消去」とは、保有個人データを保有個人データとして使えなくすることであり、当該データを削除することのほか、当該データから特定の個人を識別できないようにすること等を含む（3-3-1（データ内容の正確性の確保等）参照）。</p> <p>（※ 2）例えば、保有個人データの全部消去を求められた場合であっても、利用停止によって手続違反を是正できる場合であれば、そのような措</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>置を講ずることにより、義務を果たしたことになり、必ずしも、求められた措置をそのまま実施する必要はない。</p> <p>なお、手続違反である旨の指摘が正しくない場合は、利用停止等を行う必要はない。</p> <p>（※ 3）手続違反である旨の指摘が正しくない場合は、第三者提供を停止する必要はない。</p> <p>（※ 4）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p>	
<p>3-5-5 理由の説明（法第 31 条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、保有個人データの利用目的の通知の求め、又は保有個人データの開示、訂正等、利用停止等若しくは第三者提供の停止に関する請求（以下「開示等の請求等」という。）に係る措置の全部又は一部について、その措置をとらない旨又はその措置と異なる措置をとる旨を本人に通知（※）する場合は、併せて、本人に対して、その理由を説明するように努めなければならない。</p> <p>（※）「本人に通知」については、2-10（本人に通知）を参照のこと。</p>	<p>第 14 条 理由の説明（法第 31 条関係）</p> <p>金融分野における個人情報取扱事業者は、法第 31 条に従い、法第 27 条第 3 項、第 28 条第 3 項、第 29 条第 3 項又は第 30 条第 5 項の規定により、本人から求められ、又は請求された措置の全部又は一部について、その措置をとらない旨を通知する場合又はその措置と異なる措置をとる旨を通知する場合において、本人に対しその理由を説明する際には、措置をとらないこととし、又は異なる措置をとることとした判断の根拠及び根拠となる事実を示すこととする。</p>
<p>3-5-6 開示等の請求等に応じる手続（法第 32 条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、開示等の請求等（※ 1）において、これを受け付ける方法として次の(1)から(4)までの事項を定めることができる（※ 2）。</p> <p>なお、開示等の請求等を受け付ける方法を定めた場合には、本人の知り得る状態（本人の求めに応じて遅滞なく回答する場合を含む。）（※ 3）に置いておかなければならない（3-5-1（保有個人データに関する事項の公表等）参照）。</p> <p>なお、個人情報取扱事業者が、開示等の請求等を受け付ける方法を合理的な範囲で定めたときは、本人は、当該方法に従って開示等の請求等を行わな</p>	<p>第 15 条 開示等の請求等に応じる手続（法第 32 条関係）</p> <p>以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p> <p>1 金融分野における個人情報取扱事業者は、法第 32 条に従い、開示等の請求等を受け付ける方法を定めた場合には、第 18 条に定める「個人情報保護宣言」と一体としてインターネットのホームページでの常時掲載を行うこと、又は事務所の窓口等での掲示・備付け等を行うこととする。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>ければならず、当該方法に従わなかった場合は、個人情報取扱事業者は当該開示等の請求等を拒否することができる（※ 4）。</p> <p>また、個人情報取扱事業者は、円滑に開示等の手続が行えるよう、本人に対し、開示等の請求等の対象となる当該本人が識別される保有個人データの特定に必要な事項（住所、ID、パスワード、会員番号等）の提示を求めることができる。なお、その際には、本人が容易かつ的確に開示等の請求等を行うことができるよう、当該保有個人データの特定に資する情報を提供するなど、本人の利便性を考慮しなければならない。</p> <p>(1) 開示等の請求等の申出先 （例）担当窓口名・係名、郵送先住所、受付電話番号、受付 FAX 番号、メールアドレス等</p> <p>(2) 開示等の請求等に際して提出すべき書面（電磁的記録を含む。）の様式、その他の開示等の請求等の受付方法 （例）郵送、FAX、電子メールで受け付ける等</p> <p>(3) 開示等の請求等をする者が本人又はその代理人（①未成年者又は成年被後見人の法定代理人、②開示等の請求等を行うことにつき本人が委任した代理人）であることの確認の方法（※ 5）</p> <p>(4) 保有個人データの利用目的の通知又は保有個人データの開示をする際に徴収する手数料の徴収方法</p> <p>（※ 1）「開示等の請求等」とは、保有個人データの利用目的の通知の求め（3-5-1（保有個人データに関する事項の公表等）参照）、又は保有個人データの開示（3-5-2（保有個人データの開示）参照）、訂正等（3-5-3（保有個人データの訂正等）参照）、利用停止等若しくは第三者提供の停止（3-5-4（保有個人データの利用停止等）参照）の請求をいう。</p> <p>（※ 2）開示等の請求等に応じる手続を定めるに当たっては、当該手続が、事業の性質、保有個人データの取扱状況、開示等の請求等の受付方法</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>等に応じて適切なものになるよう配慮するとともに、必要以上に煩雑な書類を書かせたり、請求等を受け付ける窓口を他の業務を行う拠点とは別にいたずらに不便な場所に限定したりする等、本人に過重な負担を課するものとならないよう配慮しなければならない。</p> <p>（※3）「本人の知り得る状態（本人の求めに応じて遅滞なく回答する場合を含む。）」については、3-5-1（保有個人データに関する事項の公表等）を参照のこと。</p> <p>（※4）開示等の請求等を受け付ける方法を定めない場合には、自由な申請を認めることとなるので注意が必要である。</p> <p>（※5）確認の方法は、事業の性質、保有個人データの取扱状況、開示等の請求等の受付方法等に応じて、適切なものでなければならず、本人確認のために事業者が保有している個人データに比して必要以上に多くの情報を求めないようにするなど、本人に過重な負担を課するものとならないよう配慮しなくてはならない。</p> <p>事例 1）本人の場合：運転免許証、健康保険の被保険者証、個人番号カード（マイナンバーカード）表面、旅券（パスポート）、在留カード、特別永住者証明、年金手帳、印鑑証明書と実印</p> <p>事例 2）代理人の場合：本人及び代理人について、運転免許証、健康保険の被保険者証、個人番号カード（マイナンバーカード）表面、旅券（パスポート）、在留カード、特別永住者証明、年金手帳等。このほか、代理人については、代理を示す旨の委任状（親権者が未成年者の法定代理人であることを示す場合は、本人及び代理人が共に記載され、その続柄が示された戸籍謄抄本、住民票の写し）</p>	<p>2 法第 32 条第 3 項及び施行令第 10 条第 3 号に基づき、開示等の請求等をする者が本人又は施行令第 11 条に定める代理人であることの確認の方法を定めるに当たっては、十分かつ適切な確認手続とするよう留意することとする。</p> <p>なお、施行令第 11 条第 2 号の代理人による開示等の請求等に対して、事業者が本人にのみ直接開示等することは妨げられない。</p>
<p>3-5-7 手数料（法第 33 条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、保有個人データの利用目的の通知（法第 27 条第 2 項）を求められ、又は保有個人データの開示の請求（法第 28 条第 1 項）を受</p>	<p>＜法第 33 条関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>けたときは、当該措置の実施に関し、手数料の額を定め、これを徴収することができる。</p> <p>なお、当該手数料の額を定めた場合には、本人の知り得る状態（本人の求めに応じて遅滞なく回答する場合を含む。）（※）に置いておかなければならない（法第 27 条第 1 項第 3 号）。</p> <p>また、手数料を徴収する場合は、実費を勘案して合理的であると認められる範囲内において、その手数料の額を定めなければならない。</p> <p>（※）「本人の知り得る状態（本人の求めに応じて遅滞なく回答する場合を含む。）」については、3-5-1（保有個人データに関する事項の公表等）を参照のこと。</p> <p>3-5-8 裁判上の訴えの事前請求（法第 34 条関係）</p> <p>自己が識別される保有個人データの開示（※1）、訂正等（※2）又は利用停止等（※3）しくは第三者提供の停止（※4）の個人情報取扱事業者に対する請求について裁判上の訴えを提起しようとするときは、あらかじめ裁判外において当該請求を個人情報取扱事業者に対して行い、かつ、当該請求が当該個人情報取扱事業者に到達した日から2週間を経過した後でなければ、当該訴えを提起することができない（※5）（※6）。</p> <p>ただし、個人情報取扱事業者が当該裁判外の請求を拒んだとき（※7）は、2週間を経過する前に、当該請求に係る裁判上の訴えを提起することができる。</p> <p>（※1）保有個人データの開示については、3-5-2（保有個人データの開示）を参照のこと。</p> <p>（※2）保有個人データの訂正等とは、保有個人データの訂正、追加又は削除のことをいう（3-5-3（保有個人データの訂正等）参照）。</p> <p>（※3）保有個人データの利用停止等とは、保有個人データの利用の停止又</p>	<p>＜法第 34 条関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>は消去のことをいう（3-5-4（保有個人データの利用停止等）参照）。</p> <p>（※ 4）保有個人データの第三者提供の停止については、3-5-4（保有個人データの利用停止等）を参照のこと。</p> <p>（※ 5）例えば、本人から個人情報取扱事業者に対する保有個人データの開示請求が 4 月 1 日に到達した場合には、本人が当該請求に係る裁判上の訴えを提起することができるのは、当該到達日から 2 週間が経過した日（4 月 16 日）以降となる。</p> <p>（※ 6）自己が識別される保有個人データの開示、訂正等又は利用停止等若しくは第三者提供の停止について仮処分命令を申し立てるときも、同様に、あらかじめ個人情報取扱事業者に対し、これらの請求を行い、かつ、当該請求が当該個人情報取扱事業者に到達した日から 2 週間を経過した後でなければ、当該仮処分命令を申し立てることができない。</p> <p>（※ 7）「当該裁判外の請求を拒んだとき」とは、法第 28 条第 3 項、第 29 条第 3 項、及び第 30 条第 5 項に掲げる場合のほか、個人情報取扱事業者が当該請求を行った者に対して特に理由を説明することなく単に当該請求を拒む旨を通知した場合等も含まれる。</p>	
<p>3-6 個人情報の取扱いに関する苦情処理（法第35条関係）</p> <p>個人情報取扱事業者は、個人情報の取扱いに関する苦情の適切かつ迅速な処理に努めなければならない。</p> <p>また、苦情の適切かつ迅速な処理を行うに当たり、苦情処理窓口の設置や苦情処理の手順を定める等必要な体制の整備に努めなければならない（※ 1）。もっとも、無理な要求にまで応じなければならないものではない。</p> <p>なお、個人情報取扱事業者は、保有個人データの取扱いに関する苦情の申出先（個人情報取扱事業者が認定個人情報保護団体の対象事業者である場合は、その団体の名称及び苦情解決の申出先を含む。）について、本人の知り</p>	<p>第 16 条 個人情報取扱事業者による苦情の処理（法第 35 条関係） 以下の事項の他は通則ガイドラインの例による。</p> <p>法第 35 条第 2 項に定める必要な体制の整備の例としては、通則ガイドライン 3-6（個人情報の取扱いに関する苦情処理）に掲げているもの以外に、苦情処理に当たる従業者への十分な教育・研修が考えられる。</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>得る状態（本人の求めに応じて遅滞なく回答する場合を含む。）（※ 2）に置かなければならない（3-5-1（保有個人データに関する事項の公表等）参照）。</p> <p>（※ 1）消費者等本人との信頼関係を構築し事業活動に対する社会の信頼を確保するためには、「個人情報保護を推進する上での考え方や方針（いわゆる、プライバシーポリシー、プライバシーステートメント等）」を策定し、それをホームページへの掲載又は店舗の見やすい場所への掲示等により公表し、あらかじめ、対外的に分かりやすく説明することや、委託の有無、委託する事務の内容を明らかにする等、委託処理の透明化を進めることも重要である。</p>	<p>第 18 条 個人情報保護宣言の策定（法第 18 条、第 27 条及び基本方針関係）</p> <p>1 金融分野における個人情報取扱事業者は、個人情報に対する取組方針を、あらかじめ分かりやすく説明することの重要性に鑑み、事業者の個人情報保護に関する考え方及び方針に関する宣言（いわゆるプライバシーポリシー、プライバシーステートメント等。本ガイドラインにおいて「個人情報保護宣言」という。）を策定し、例えば、次に掲げる内容をインターネットのホームページへの常時掲載又は事務所の窓口等での掲示・備付け等により、公表することとする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 関係法令等の遵守、個人情報を目的外に利用しないこと及び苦情処理に適切に取り組むこと等、個人情報保護への取組方針の宣言</li> <li>② 法第 18 条における個人情報の利用目的の通知・公表等の手続についての分かりやすい説明</li> <li>③ 法第 27 条における開示等の手続等、個人情報の取扱いに関する諸手続についての分かりやすい説明</li> <li>④ 個人情報の取扱いに関する質問及び苦情処理の窓口</li> </ol> <p>2 個人情報保護宣言には、消費者等、本人の権利利益保護の観点から、事業活動の特性、規模及び実態に応じて、次に掲げる点を考慮した記述をできるだけ盛り込むことが望ましい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 保有個人データについて本人から求めがあった場合には、ダイレクトメールの発送停止など、自主的に利用停止等に応じること。</li> <li>② 委託の有無、委託する事務の内容を明らかにする等、委託処理の透明化を進めること。</li> <li>③ 事業者がその事業内容を勘案して顧客の種類ごとに利用目的を限定して示したり、事業者が本人の選択による利用目的の限定に自主的に取り組</li> </ol>



<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>（※ 2）「本人の知り得る状態（本人の求めに応じて遅滞なく回答する場合を含む。）」については、3-5-1（保有個人データに関する事項の公表等）を参照のこと。</p>	<p>むなど、本人にとって利用目的がより明確になるようにすること。 ④ 個人情報の取得元又はその取得方法（取得源の種類等）を可能な限り具体的に明記すること。</p>
<p>3-7 匿名加工情報取扱事業者等の義務（法第 36 条～第 39 条関係） 匿名加工情報取扱事業者等の義務については、別途定める「個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（匿名加工情報編）」を参照のこと。</p>	<p>＜法第 36 条～第 39 条関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>
<p>4 漏えい等の事案が発生した場合等の対応</p> <p>漏えい等（※）の事案が発生した場合等において、二次被害の防止、類似事案の発生防止等の観点から、個人情報取扱事業者が実施することが望まれる対応については、別に定める。</p> <p>（※）「漏えい等」とは、漏えい、滅失又は毀損のことをいう（3-3-2（安全管理措置）参照）。</p>	<p>第 17 条 個人情報等の漏えい事案等への対応 ＜「金融分野における個人情報保護に関するガイドラインの安全管理措置等についての実務指針」についても留意する。＞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>金融分野における個人情報取扱事業者は、個人情報の漏えい事案等又は匿名加工情報の作成に用いた個人情報から削除した記述等及び個人識別符号並びに法第 36 条第 1 項の規定により行った加工の方法に関する情報の漏えい事案（以下「個人情報等の漏えい事案等」という。）の事故が発生した場合には、監督当局等に直ちに報告することとする。</li> <li>金融分野における個人情報取扱事業者は、個人情報等の漏えい事案等の事故が発生した場合には、二次被害の防止、類似事案の発生回避等の観点から、当該事案等の事実関係及び再発防止策等を早急に公表することとする。</li> <li>金融分野における個人情報取扱事業者は、個人情報等の漏えい事案等の事故が発生した場合には、当該事案等の対象となった本人に速やかに当該事案等の事実関係等の通知等を行うこととする。</li> </ol>
<p>5 「勧告」、「命令」、「緊急命令」等についての考え方 法第 42 条に規定される個人情報保護委員会の「勧告（第 1 項）」「命令（第 2 項）」及び「緊急命令（第 3 項）」については、個人情報取扱事業者等が本</p>	<p>＜「勧告」、「命令」、「緊急命令」等についての考え方は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>ガイドラインに沿って必要な措置等を講じたか否かにつき判断して行うものとする。</p> <p>すなわち、本ガイドラインの中で、「しなければならない」及び「してはならない」と記述している事項については、これらに従わなかった場合、個人情報取扱事業者においては第 16 条から第 18 条まで、第 20 条から第 22 条まで、第 23 条（第 4 項を除く。）、第 24 条、第 25 条、第 26 条（第 2 項を除く。）、第 27 条、第 28 条（第 1 項を除く。）、第 29 条第 2 項若しくは第 3 項、第 30 条第 2 項、第 4 項若しくは第 5 項又は第 33 条第 2 項若しくは第 36 条（第 6 項を除く。）の規定違反、匿名加工情報取扱事業者においては第 37 条又は第 38 条の規定違反と判断される可能性がある。</p> <p>違反と判断された場合において、実際に個人情報保護委員会が「勧告」を行うこととなるのは、個人の権利利益を保護するため必要があると個人情報保護委員会が認めたときとなる。</p> <p>一方、本ガイドライン中、「努めなければならない」、「望ましい」等と記述している事項については、これに従わなかったことをもって直ちに法違反と判断されることはないが、法の基本理念（法第 3 条）を踏まえ、事業者の特性や規模に応じ可能な限り対応することが望まれるものである。</p> <p>「命令」は、単に「勧告」に従わないことをもって発せられることはなく、正当な理由なくその勧告に係る措置をとらなかった場合において個人の重大な権利利益の侵害が切迫していると個人情報保護委員会が認めたときに発せられる。</p> <p>なお、「勧告」に従わなかったか否かを明確にするため、個人情報保護委員会は、「勧告」に係る措置を講ずべき期間を設定して「勧告」を行うこととする。</p> <p>「緊急命令」は、個人情報取扱事業者等が上記各規定に違反した場合において、個人の重大な権利利益を害する事実があるため緊急に措置をとる必要があると個人情報保護委員会が認めたときに、「勧告」を前置せずに行う。</p> <p>また、「命令」及び「緊急命令」に従わなかったか否かを明確にするため、</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>個人情報保護委員会は、「命令」及び「緊急命令」に係る措置を講ずべき期間を設定して「命令」及び「緊急命令」を行い、当該期間中に措置が講じられない場合は、「罰則（法第 84 条、第 87 条）」が適用される。</p>	
<p>6 域外適用及び適用除外（法第 75 条、第 76 条関係）</p> <p>6-1 域外適用（法第 75 条関係）</p> <p>外国にある個人情報取扱事業者のうち、日本の居住者等国内にある者に対して物品やサービスの提供を行い、これに関連してその者を本人とする個人情報を取得した者が、外国においてその個人情報又は当該個人情報を用いて作成した匿名加工情報を取り扱う場合（※1）には、当該外国にある個人情報取扱事業者に対して法に定める次の(1)から(9)までに掲げる規定が適用される（※2）。なお、法第 75 条には明記されていないが、法第 17 条（適正取得）及び法第 18 条第 2 項（直接書面等による取得）の規定については、個人情報の取得の行為の重要部分は国内において行われることから、適用されるものと解される。</p> <p>(1) 利用目的の特定等（法第 15 条関係。3-1-1（利用目的の特定）、3-2-1（適正取得）参照）</p> <p>(2) 利用目的による制限（法第 16 条関係。3-1-3（利用目的による制限）参照）</p> <p>(3) 利用目的の通知又は公表（法第 18 条関係。ただし同条第 2 項を除く。3-2-3（利用目的の通知又は公表）参照）</p> <p>(4) データ内容の正確性の確保等、安全管理措置、従業者の監督、委託先の監督、第三者提供の制限、外国にある第三者への提供の制限、第三者提供に係る記録の作成等（法第 19 条～第 25 条関係。3-3-1（データ内容の正確性の確保等）～3-4-5（第三者提供に係る記録の作成等）参照）</p> <p>(5) 保有個人データに関する事項の公表等、開示、訂正等、利用停止等、理由の説明、開示等の請求等に応じる手続、利用目的の通知の求め又は開示</p>	<p>＜法第 75 条、第 76 条関係は、通則ガイドラインの例による。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>請求に係る手数料、苦情処理、匿名加工情報の作成等（法第 27 条～第 36 条関係。3-5-1（保有個人データに関する事項の公表等）～3-7（匿名加工情報取扱事業者等の義務）参照）</p> <p>(6) 指導及び助言（法第 41 条関係）</p> <p>(7) 勧告（法第 42 条第 1 項関係。5（「勧告」、「命令」、「緊急命令」等についての考え方）参照）</p> <p>(8) 個人情報保護委員会の権限の行使の制限（法第 43 条関係）</p> <p>(9) 適用除外（法第 76 条関係。6-2（適用除外）参照）</p> <p>（※ 1）具体的には、「日本に支店や営業所等を有する個人情報取扱事業者が外国にある本店において個人情報又は匿名加工情報（以下「個人情報等」という。）を取り扱う場合」、「日本において個人情報を取得した個人情報取扱事業者が海外に活動拠点を移転した後に引き続き個人情報等を取り扱う場合」、「外国のインターネット通信販売事業者が、日本の消費者からその個人情報を取得し、商品を販売・配送する場合」、「外国のメールサービス提供事業者が、アカウント設定等のために日本の消費者からその個人情報を取得し、メールサービスを提供する場合」等が考えられる。</p> <p>また、外国にある宿泊施設が、日本国内の旅行会社から宿泊者の個人情報の提供を受ける場合等、単に第三者提供を受けるなどして日本国内にある者の個人情報を取得したにすぎず、「日本国内にある者」に対する物品や役務の提供等を行っていない場合は、法の適用はなく、この場合においては、日本の旅行会社が、法の規定に従い、本人同意を取得するなど外国にある第三者に提供するために必要な措置を講ずることとなる。一方、外国の宿泊施設が、宿泊予約を直接受け付けるために日本国内にある者から直接個人情報を取得し、宿泊サービスを提供する場合は、法第 75 条の適用対象となると解される。</p> <p>（※ 2）法第 75 条により法の適用を受ける外国事業者が、上記(1)から(9)まで</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>に掲げる規定に違反した場合には、個人情報保護委員会が法第 41 条又は第 42 条第 1 項に基づき指導・助言又は勧告を行うことができる。</p>	
<p>6-2 適用除外（法第 76 条関係）</p> <p>報道機関（※ 1）が報道の用に供する目的で個人情報等を取り扱う場合、小説家等が著述（※ 2）の用に供する目的で個人情報等を取り扱う場合、学術研究機関等が学術研究の用に供する目的で個人情報等を取り扱う場合（※ 3）、宗教団体が宗教活動の用に供する目的で個人情報等を取り扱う場合（※ 4）及び政治団体が政治活動の用に供する目的で個人情報等を取り扱う場合（※ 5）は、憲法が保障する基本的人権への配慮から、法第 4 章に定める個人情報取扱事業者等の義務等に係る規定は適用されない（※ 6）。</p> <p>ただし、上記に定める各主体は、安全管理措置、苦情処理等、個人情報等の適正な取扱いを確保するために必要な措置を自ら講じ、かつ、当該措置の内容を公表するよう努めなければならない。</p> <p>（※ 1）「報道」とは、新聞、ラジオ、テレビ等を通じて社会の出来事などを広く知らせることをいい、「報道機関」とは、報道を目的とする施設、組織体をいう。なお、「報道機関」の概念には、報道を業とするフリージャーナリストのような個人も含まれる。</p> <p>（※ 2）「著述」とは、文芸作品の創作、文芸批評、評論等がこれに該当し、学術書、実用書等人間の知的活動の成果といえるものを書き表すことも、これに該当する。一方、名簿等のようにデータの羅列にすぎないものは「著述」に該当しない。</p> <p>（※ 3）「学術」とは、人文・社会科学及び自然科学並びにそれらの応用の研究であり、あらゆる学問分野における研究活動及びその所産としての知識・方法の体系をいい、具体的活動としての「学術研究」としては、新しい法則や原理の発見、分析や方法論の確立、新しい知識やその応用法の体系化、先端的な学問領域の開拓などをいう。</p>	<p>＜法第 76 条関係は、通則ガイドラインの例による。ただし、金融分野の個人情報取扱事業者には、法第 76 条関係には該当しない。＞</p>

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>また、「大学その他の学術研究を目的とする機関又は団体」とは、私立大学、公益法人等の研究所等の学術研究を主たる目的として活動する機関や「学会」をいい、「それらに属する者」とは、私立大学の教員、公益法人等の研究所の研究員、学会の会員等をいう。</p> <p>なお、民間団体付属の研究機関等における研究活動についても、当該機関が学術研究を主たる目的とするものであって、当該活動が学術研究の用に供する目的である場合には、法第 76 条第 1 項第 3 号により、法第 4 章の規定は適用されない。</p> <p>一方で、当該機関が単に製品開発を目的としている場合は「学術研究を目的とする機関又は団体」には該当しないが、製品開発と学術研究の目的が併存している場合には、主たる目的により判断する。また、当該機関が学術研究を主たる目的とするものであっても、その副次的な活動として製品開発を目的として個人情報等を取り扱う場合は、当該活動は、「学術研究の用に供する目的」とは解されないため、当該活動における個人情報等の取扱いについては、法第 4 章の規定が適用される。</p> <p>（※ 4）「宗教団体」とは、宗教の教義を広め、儀式行事を行い、及び信者を教化育成することを主たる目的とする、①礼拝の施設を備える団体（神社、寺院、教会、修道院その他これらに類する団体）、又は②単位宗教団体を包括する団体（教派、宗派、教団、教会、修道会、司教区その他これに類する団体）をいう。</p> <p>また、「宗教活動」とは、宗教の教義を広め、儀式行事を行い、及び信者を教化育成することであり、「これに付随する活動」とは、霊園、宿坊の経営や他宗派の人々に対する葬儀の運営のように、宗教活動を主たる目的とする活動とまではいえないものの、その活動の副次的効果として教義を広める等の効果を期待して行われているものをいう。</p> <p>（※ 5）「政治団体」とは、①政治上の主義又は施策を推進、支持又は反対することを本来の目的とする団体、②特定の公職の候補者を推薦、支持</p>	

<p>個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞</p>	<p>金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）</p>
<p>又は反対することを本来の目的とする団体、③その他、政治上の主義若しくは施策を推進、支持若しくは反対すること、又は特定の公職の候補者を推薦、支持若しくは反対することをその主たる活動として組織的かつ継続的に行う団体をいう。また、こうした団体の活動と密接な関連を有する、政治上の主義又は施策を研究する団体や政党のために資金上の援助をすることを目的とする団体も、本条の「政治団体」に含まれる。</p> <p>また、「政治活動」とは、上記①から③までの活動を行うことであり、「これに付随する活動」とは、労働運動の支援等、それ自体が政治活動とはいえないものの、副次的に政治目的の達成に役立つ活動をいう。</p> <p>（※6）ただし、法第 76 条第 1 項各号に定める者についても、法第 83 条（個人情報データベース等不正提供罪）は適用される点について留意が必要である。</p>	
<p>7 ガイドラインの見直し</p> <p>個人情報の保護についての考え方は、社会情勢の変化、国民の認識の変化、技術の進歩、国際的動向等に応じて変わり得るものであり、本ガイドラインは、法の施行後の状況等諸環境の変化を踏まえて、必要に応じ見直しを行うものとする。</p>	<p>第 19 条 ガイドラインの見直し</p> <p>個人情報の保護についての考え方は、社会情勢の変化、国民の認識の変化、技術の進歩、国際動向等に応じて変わり得るものであり、本ガイドラインは、法の施行後の状況等諸環境の変化を踏まえて、必要に応じ見直しを行うものとする。</p>

## 8 (別添) 講ずべき安全管理措置の内容

法第 20 条に定める安全管理措置として、個人情報取扱事業者が具体的に講じなければならない措置や当該措置を実践するための手法の例等を次に示す。

安全管理措置を講ずるための具体的な手法については、個人データが漏えい等をした場合に本人が被る権利利益の侵害の大きさを考慮し、事業の規模及び性質、個人データの取扱状況（取り扱う個人データの性質及び量を含む。）、個人データを記録した媒体の性質等に起因するリスクに応じて、必要かつ適切な内容とすべきものであるため、必ずしも次に掲げる例示の内容の全てを講じなければならないわけではなく、また、適切な手法はこれらの例示の内容に限られない。

なお、中小規模事業者（※1）については、その他の個人情報取扱事業者と同様に、法第 20 条に定める安全管理措置を講じなければならないが、取り扱う個人データの数量及び個人データを取り扱う従業者数が一定程度にとどまること等を踏まえ、円滑にその義務を履行し得るような手法の例を示すこととする。もっとも、中小規模事業者が、その他の個人情報取扱事業者と同様に「手法の例示」に記述した手法も採用することは、より望ましい対応である。

（※1）「中小規模事業者」とは、従業員（※2）の数が 100 人以下の個人情報取扱事業者をいう。ただし、次に掲げる者を除く。

- ・その事業の用に供する個人情報データベース等を構成する個人情報によって識別される特定の個人の数合計が過去 6 月以内のいずれかの日において 5,000 を超える者
- ・委託を受けて個人データを取り扱う者

（※2）中小企業基本法（昭和 38 年法律第 154 号）における従業員をいい、労働基準法（昭和 22 年法律第 49 号）第 20 条の適用を受ける労働者に相当する者をいう。ただし、同法第 21 条の規定により同法第 20 条の適用が除外されている者は除く。

＜「金融分野における個人情報保護に関するガイドラインの安全管理措置等についての実務指針」を適用する。＞



8-1 基本方針の策定

個人情報取扱事業者は、個人データの適正な取扱いの確保について組織として取り組むために、基本方針を策定することが重要である。

具体的に定める項目の例としては、「事業者の名称」、「関係法令・ガイドライン等の遵守」、「安全管理措置に関する事項」、「質問及び苦情処理の窓口」等が考えられる。

8-2 個人データの取扱いに係る規律の整備

個人情報取扱事業者は、その取り扱う個人データの漏えい等の防止その他の個人データの安全管理のために、個人データの具体的な取扱いに係る規律を整備しなければならない。

講じなければならない措置	手法の例示	中小規模事業者における手法の例示
○個人データの取扱いに係る規律の整備	<p>取得、利用、保存、提供、削除・廃棄等の段階ごとに、取扱方法、責任者・担当者及びその任務等について定める個人データの取扱規程を策定することが考えられる。なお、具体的に定める事項については、以降に記述する組織的安全管理措置、人的安全管理措置及び物理的安全管理措置の内容並びに情報システム（パソコン等の機器を含む。）を使用して個人データを取り扱う場合（インターネット等を通じて外部と送受信等する場合を含む。）は技術的安全管理措置の内容を織り込むことが重要である。</p>	<p>・個人データの取得、利用、保存等を行う場合の基本的な取扱方法を整備する。</p>

### 8-3 組織的安全管理措置

個人情報取扱事業者は、組織的安全管理措置として、次に掲げる措置を講じなければならない。

#### (1) 組織体制の整備

安全管理措置を講ずるための組織体制を整備しなければならない。

#### (2) 個人データの取扱いに係る規律に従った運用

あらかじめ整備された個人データの取扱いに係る規律に従って個人データを取り扱わなければならない。

なお、整備された個人データの取扱いに係る規律に従った運用の状況を確認するため、システムログ又は利用実績を記録することも重要である。

#### (3) 個人データの取扱状況を確認する手段の整備

個人データの取扱状況を確認するための手段を整備しなければならない。

#### (4) 漏えい等の事案に対応する体制の整備

漏えい等の事案の発生又は兆候を把握した場合に適切かつ迅速に対応するための体制を整備しなければならない。

なお、漏えい等の事案が発生した場合、二次被害の防止、類似事案の発生防止等の観点から、事案に応じて、事実関係及び再発防止策等を早急に公表することが重要である（※）。

（※）個人情報取扱事業者において、漏えい等の事案が発生した場合等の対応の詳細については、別に定める（4（漏えい等の事案が発生した場合等の対応）参照）。

#### (5) 取扱状況の把握及び安全管理措置の見直し

個人データの取扱状況を把握し、安全管理措置の評価、見直し及び改善に取り組まなければならない。

個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編）  
（平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞

金融分野における個人情報保護に関するガイドライン  
（平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）

講じなければならぬ措置	手法の例示	中小規模事業者における手法の例示
(1) 組織体制の整備	<p>（組織体制として整備する項目の例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人データの取扱いに関する責任者の設置及び責任の明確化</li> <li>・ 個人データを取り扱う従業員及びその役割の明確化</li> <li>・ 上記の従業員が取り扱う個人データの範囲の明確化</li> <li>・ 法や個人情報取扱事業者において整備されている個人データの取扱いに係る規律に違反している事実又は兆候を把握した場合の責任者への報告連絡体制</li> <li>・ 個人データの漏えい等の事案の発生又は兆候を把握した場合の責任者への報告連絡体制</li> <li>・ 個人データを複数の部署で取り扱う場合の各部署の役割分担及び責任の明確化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人データを取り扱う従業員が複数いる場合、責任ある立場の者とその他の者を区分する。</li> </ul>

個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞		金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）
講じなければならぬ措置	手法の例示	中小規模事業者における手法の例示
(2) 個人情報の取扱いに係る規律に従った運用	<p>個人データの取扱いに係る規律に従った運用を確保するため、例えば次のような項目に関して、システムログその他の個人データの取扱いに係る記録の整備や業務日誌の作成等を通じて、個人データの取扱いの検証を可能とすることが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人情報データベース等の利用・出力状況</li> <li>・個人データが記載又は記録された書類・媒体等の持ち運び等の状況</li> <li>・個人情報データベース等の削除・廃棄の状況（委託した場合の消去・廃棄を証明する記録を含む。）</li> <li>・個人情報データベース等を情報システムで取り扱う場合、担当者の情報システムの利用状況（ログイン実績、アクセスログ等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あらかじめ整備された基本的な取扱方法に従って個人データが取り扱われていることを、責任ある立場の者が確認する。</li> </ul>
(3) 個人情報の取扱状況を確認する手段の整備	<p>例えば次のような項目をあらかじめ明確化しておくことにより、個人情報の取扱状況を把握可能とすることが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人情報データベース等の種類、名称</li> <li>・個人データの項目</li> <li>・責任者・取扱部署</li> <li>・利用目的</li> <li>・アクセス権を有する者 等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あらかじめ整備された基本的な取扱方法に従って個人データが取り扱われていることを、責任ある立場の者が確</li> </ul>

		認する。
--	--	------

講じなければならぬ措置	手法の例示	中小規模事業者における手法の例示
(4) 漏えい等の事案に対応する体制の整備	漏えい等の事案の発生時に例えば次のような対応を行うための、体制を整備することが考えられる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事実関係の調査及び原因の究明</li> <li>・ 影響を受ける可能性のある本人への連絡</li> <li>・ 個人情報保護委員会等への報告</li> <li>・ 再発防止策の検討及び決定</li> <li>・ 事実関係及び再発防止策等の公表等</li> </ul>	・ 漏えい等の事案の発生時に備え、従業員から責任ある立場の者に対する報告連絡体制等をあらかじめ確認する。
(5) 取扱状況の把握及び安全管理措置の見直し	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人データの取扱状況について、定期的に自ら行う点検又は他部署等による監査を実施する。</li> <li>・ 外部の主体による監査活動と合わせて、監査を実施する。</li> </ul>	・ 責任ある立場の者が、個人データの取扱状況について、定期的に点検を行う。

8-4 人的安全管理措置

個人情報取扱事業者は、人的安全管理措置として、次に掲げる措置を講じなければならない。また、個人情報取扱事業者は、従業員に個人データを取り扱わせるに当たっては、法第 21 条に基づき従業員に対する監督をしなけ

なければならない（3-3-3（従業員の監督）参照）。

○従業員の教育

従業員に、個人データの適正な取扱いを周知徹底するとともに適切な教育を行わなければならない。

講じなければならぬ措置	手法の例示	中小規模事業者における手法の例示
○従業員の教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人データの取扱いに関する留意事項について、従業員に定期的な研修等を行う。</li> <li>・ 個人データについての秘密保持に関する事項を就業規則等に盛り込む。</li> </ul>	（同左）

8-5 物理的安全管理措置

個人情報取扱事業者は、物理的安全管理措置として、次に掲げる措置を講じなければならない。

(1) 個人データを取り扱う区域の管理

個人情報データベース等を取り扱うサーバやメインコンピュータ等の重要な情報システムを管理する区域（以下「管理区域」という。）及びその他の個人データを取り扱う事務を実施する区域（以下「取扱区域」という。）について、それぞれ適切な管理を行わなければならない。

(2) 機器及び電子媒体等の盗難等の防止

個人データを取り扱う機器、電子媒体及び書類等の盗難又は紛失等を防止するために、適切な管理を行わなければならない。

(3) 電子媒体等を持ち運ぶ場合の漏えい等の防止

個人データが記録された電子媒体又は書類等を持ち運ぶ場合、容易に個

個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞	金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）
--	---

人データが判明しないよう、安全な方策を講じなければならない。

なお、「持ち運ぶ」とは、個人データを管理区域又は取扱区域から外へ移動させること又は当該区域の外から当該区域へ移動させることをいい、事業所内の移動等であっても、個人データの紛失・盗難等に留意する必要がある。

- (4) 個人データの削除及び機器、電子媒体等の廃棄
- 個人データを削除し又は個人データが記録された機器、電子媒体等を廃棄する場合は、復元不可能な手段で行わなければならない。
- また、個人データを削除した場合、又は、個人データが記録された機器、電子媒体等を廃棄した場合には、削除又は廃棄した記録を保存することや、それらの作業を委託する場合には、委託先が確実に削除又は廃棄したことについて証明書等により確認することも重要である。

講じなければならぬ措置	手法の例示	中小規模事業者における手法の例示
(1)個人データを取り扱う区域の管理	（管理区域の管理手法の例） ・入退室管理及び持ち込む機器等の制限等 なお、入退室管理の方法としては、ICカード、ナンバーキー等による入退室管理システムの設置等が考えられる。 （取扱区域の管理手法の例） ・壁又は間仕切り等の設置、座席配置の工夫、のぞき込みを防止する措置の実施等による、権限を有しない者による個人データの閲覧等の防止	・個人データを取り扱うことのできる従業者及び本人以外が容易に個人データを閲覧等できないような措置を講ずる。

講じなければならぬ措置	手法の例示	中小規模事業者における手法の例示
(2) 機器及び電子媒体等の盗難等の防止	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人データを取り扱う機器、個人データが記録された電子媒体又は個人データが記載された書類等を、施錠できるキャビネット・書庫等に保管する。</li> <li>・ 個人データを取り扱う情報システムが機器のみで運用されている場合は、当該機器をセキュリティワイヤー等により固定する。</li> </ul>	（同左）
(3) 電子媒体等を持ち運ぶ場合の漏えい等の防止	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 持ち運ぶ個人データの暗号化、パスワードによる保護等を行った上で電子媒体に保存する。</li> <li>・ 封緘、目隠しシールの貼付けを行う。</li> <li>・ 施錠できる搬送容器を利用する。</li> </ul>	・ 個人データが記録された電子媒体又は個人データが記載された書類等を持ち運ぶ場合、パスワードの設定、封筒に封入し鞆に入れて搬送する等、紛失・盗難等を防ぐための安全な



個人情報保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞		金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）	
		方策を講ずる。	
講じなければならない措置	手法の例示	中小規模事業者における手法の例示	
(4)個人データの削除及び機器、電子媒体等の廃棄	<p>（個人データが記載された書類等を廃棄する方法の例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・焼却、溶解、適切なシュレッダー処理等の復元不可能な手段を採用する。</li> </ul> <p>（個人データを削除し、又は、個人データが記録された機器、電子媒体等を廃棄する方法の例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報システム（パソコン等の機器を含む。）において、個人データを削除する場合、容易に復元できない手段を採用する。</li> <li>・個人データが記録された機器、電子媒体等を廃棄する場合、専用のデータ削除ソフトウェアの利用又は物理的な破壊等の手段を採用する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人データを削除し、又は、個人データが記録された機器、電子媒体等を廃棄したことを、責任ある立場の者が確認する。</li> </ul>	
<p>8-6 技術的安全管理措置</p> <p>個人情報取扱事業者は、情報システム（パソコン等の機器を含む。）を使用して個人データを取り扱う場合（インターネット等を通じて外部と送受信等する場合を含む。）、技術的安全管理措置として、次に掲げる措置を講じなければならない。</p> <p>(1) アクセス制御</p> <p>担当者及び取り扱う個人情報データベース等の範囲を限定するために、適切なアクセス制御を行わなければならない。</p>			

- (2) アクセス者の識別と認証  
 個人データを取り扱う情報システムを使用する従業者が正当なアクセス権を有する者であることを、識別した結果に基づき認証しなければならない。
- (3) 外部からの不正アクセス等の防止  
 個人データを取り扱う情報システムを外部からの不正アクセス又は不正ソフトウェアから保護する仕組みを導入し、適切に運用しなければならない。
- (4) 情報システムの使用に伴う漏えい等の防止  
 情報システムの使用に伴う個人データの漏えい等を防止するための措置を講じ、適切に運用しなければならない。

講じなければならない措置	手法の例示	中小規模事業者における手法の例示
(1) アクセス制御	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人情報データベース等を取り扱うことのできる情報システムを限定する。</li> <li>・ 情報システムによってアクセスすることのできる個人情報データベース等を限定する。</li> <li>・ ユーザーIDに付与するアクセス権により、個人情報データベース等を取り扱う情報システムを使用できる従業者を限定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人データを取り扱うことのできる機器及び当該機器を取り扱う従業者を明確化し、個人データへの不要なアクセスを防止する。</li> </ul>

個人情報保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞		金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）	
(2) アクセス者の識別と認証	<p>（情報システムを使用する従業者の識別・認証手法の例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ユーザーID、パスワード、磁気・ICカード等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・機器に標準装備されているユーザー制御機能（ユーザーアカウント制御）により、個人情報データベース等を取り扱う情報システムを使用する従業者を識別・認証する。</li> </ul>	
講じなければならない措置	<p>手法の例示</p>	<p>中小規模事業者における手法の例示</p>	
(3) 外部からの不正アクセス等の防止	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報システムと外部ネットワークとの接続箇所にファイアウォール等を設置し、不正アクセスを遮断する。</li> <li>・情報システム及び機器にセキュリティ対策ソフトウェア等（ウイルス対策ソフトウェア等）を導入する。</li> <li>・機器やソフトウェア等に標準装備されている自動更新機能等の活用により、ソフトウェア等を最</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人データを取り扱う機器等のオペレーティングシステムを最新の状態に保持する。</li> </ul>	

個人情報保護に関する法律についてのガイドライン（通則編） （平成 28 年個人情報保護委員会告示第 6 号）＜法令条文省略＞		金融分野における個人情報保護に関するガイドライン （平成 29 年個人情報保護委員会・金融庁告示第 1 号）	
	<p>新状態とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ログ等の定期的な分析により、不正アクセス等を検知する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人データを取り扱う機器等にセキュリティ対策ソフトウェア等を導入し、自動更新機能等の活用により、これを最新状態とする。</li> </ul>	
(4)情報システムの使用に伴う漏えい等の防止	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報システムの設計時に安全性を確保し、継続的に見直す（情報システムのぜい弱性を突いた攻撃への対策を講ずることも含む。）。</li> <li>・個人データを含む通信の経路又は内容を暗号化する。</li> <li>・移送する個人データについて、パスワード等による保護を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メール等により個人データの含まれるファイルを送信する場合に、当該ファイルへのパスワードを設定する。</li> </ul>	